『新唐書』西域伝訳注(二)

小 谷 仲 男
菅 沼 愛 語

天竺(インド)

天竺国は漢の身毒国のことである。あるいは摩伽陀(マガダ)とも婆羅門ともいった。長安を去ること九千六百里で(西域)都護の治所からは一千八百里離れていた。⁽¹⁾葱嶺(パミール)の南に位置し、その周囲は三万里であった。東、西、南、北、中の五つの天竺に分かれていた。各国は数百の城邑を有していた。南天竺は海(インド洋)にせまり、ライオン・ヒョウ・獬・ラクダ・サイ・ゾウ・火齊珠・琅玕・石蜜(氷砂糖)・黒塩を産した。北天竺は雪山(ヒマラヤ山脈)によって隔てられており、山が壁のように取り巻いており、ただ南には出口があり、その谷あいを国の門戸となした。東天竺は海のほとりにあり、扶南(カンボディア)、林邑(ヴェトナム)に隣接していた。西天竺は罽賓(カピシー)、波斯(ペルシア)と隣接していた。中天竺は四つの天竺国が会するところに位置した(『通典』卷一九三辺防九天竺三伝)。都城は茶縛和羅城(Pataliputra パータリプトラ?)といい、迦毗黎河(恆河)ガンジス)の河岸にあった。都城以外の城が数百もあり、みな長を置いていた。また別の独立国が数十あり、そこには王を置いていた。舍衛(Sravasti シユラーヴァ

ステイー)といひ、迦没路 (Kamarūpa = 東インド) といひ、その国の戸口はみな東に向いていた。迦尸国 (Kāśī カシー) というのはまた波羅奈ともいひ、波羅那斯 (Varanasi ヴァーラーナシー) ともいひ、中天竺の家畜に、稍割牛という動物がいた。黒色で角は細く、角の長は四尺あまりであった。十日に一度、角を切つてやらないと稍割牛は苦しんで死んでしまう。ある人は、この牛の血を飲むと五百歳まで寿命が延びると言っている。この牛の年も、これくらいであった (『通典』天竺三伝²)。

中天竺王の姓は乞利咄 (Ksatya = クシャトリア) 氏で、また刹利ともいひ、王は代々中天竺を支配し、篡奪や弑殺はなかつた。中天竺の土地は湿気が多くて熱い。稲は一年に四度熟し、長いものはラクダの体が没するくらいの高さであった。貝齒 (子安貝) を貨幣とした。金剛石 (ダイヤモンド)、梅檀、鬱金 (サフラン) を産し、大秦 (ローマ)、扶南、交趾と貿易した (『旧唐書』卷一九八天竺伝)。人は裕福に暮らし、戸籍簿と地籍簿がなく、王の領地を耕作するものは税金を納めた。最高の礼としては足をねぶり踵をさすつた。家ごとに奇楽を催す倡伎がいた。王や大臣はみな錦や毛織物を着用した。螺髻 (ほら貝のように束ねたもとどり) を頭のとっぺんで作り、あまつた髪の毛は切つてカールにした。男性は耳を穿つてイヤリングをたらしした。(耳に) 黄金をかけるものもいた。耳たぶの垂れているものを上類となした。素足で過ごし、衣装は白を尊んだ (『通典』天竺伝)。婦人は首に金・銀・真珠のネックレスを飾つた。死者は、その亡骸を焼き遺灰をとつて卒塔婆を建てた。あるいは (死者の遺体は) 野原や河に遺棄し、鳥獸や魚・亀の餌にした。服喪の期間は定まつていない。謀反を起こしたものは幽閉して殺された。小さな犯罪を犯したものは金銭で罪を贖つた。親不孝者は (罰として) 手足を斬り落とし、耳鼻を削ぎ、辺境地帯に移された。文字があり、歩曆 (天文測算術) を善くし (『悉曇十二章 (梵字の元始・生字を列次した兒童用の科本)』を学んだ。貝多羅 (śāla-patra) に筆記して出来事をしるした (『大唐西域記』卷二印度、『通典』天竺伝⁴)。これを妄りに梵天法と言つた。仏法を尊び、殺生や飲酒をしなかつ

た。国中の所々を指し示して仏の古跡であると言っている(『旧唐書』天竺伝)。盟誓を信じ、禁呪を伝え、祈つて龍を呼び起こすと雲がわき雨が降ると言っている。

隋の煬帝の時、裴矩を派遣して西域諸国と通好させたが、ただ天竺と拂菻(ビザンツ)だけが来朝しなかった。煬帝はこれを恨みに思っていた。武徳年間中(六一八〜六二六)に天竺に大乱が起った。王の尸羅逸多(Śhādīya)〔戒日王ハルシャ・ヴァルダナ〕在位六〇五〜六四七年)が軍隊を統率して戦うと向かうところ敵なしの状態であった。戦象は鞍をはずさず兵士も甲冑を脱がず、(六年かかって)四天竺を討つたので王達はみな北面して臣従した。たまたま唐の仏教僧の玄奘がその国を訪問した時(貞観十年=六三六年)、尸羅逸多はこれを召し謁見して言った。「なんじの国には聖人が出現し、秦王破陣楽という音楽を作ったというが、試みに私のために秦王(唐の太宗李世民)の人となりをお話してくれ。」そこで玄奘は太宗の神の如き武勇について大まかに説明し、太宗が世の災い乱れを平定し、四方の諸民族が服属して方物を献上している状況を話して聞かせた。尸羅逸多は喜び、「私は東面して唐に朝貢しよう」と言った。貞観十五年(六四一)、尸羅逸多は自ら摩伽陀王を称して使節を派遣し、太宗に上書した。太宗は雲騎尉の梁懷璣に命じ節を持たせて派遣し、天竺を慰撫せしめた。尸羅逸多は驚き、国人に問うて言った。「いにしえより摩訶震旦(中国)からの使いが、わが国に来た事があったか?」みな、こたえて言った。「摩訶震旦からの使者が来た事はありません。」夷狄は中国の事を摩訶震旦と呼んだのである。尸羅逸多は膜拜(二両手を上げ地に伏して拝礼)して太宗の詔書を受け、頭の上に勅書を戴いた。そこでまた尸羅逸多は中国使節の帰国に随行させて使者を答礼使として派遣し、唐に朝貢した。これに対し、太宗は衛尉丞の李義表を報使として天竺に遣わした(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。尸羅逸多は大を遣して李義表を迎えさせ、都城を隅から隅まで李義表一行に自由に見学させて、道中で香を焚いて歓迎した。尸羅逸多は群臣を引き連れ、東に顔を向けて太宗からの勅書を受けた。尸羅逸多はまた使者を唐に遣わして、火珠、鬱金、

菩提樹を献上した（『旧唐書』天竺伝）。

貞観二十二年（六四八）、太宗は右衛率府長史の王玄策を天竺に派遣し、蔣師仁を副使となした。しかし王玄策が天竺に到着する前に口羅逸多は死去し、天竺国内は乱れて、大臣の帝那伏帝阿羅那順（Triṅṅkaṅk ティラブクティ・アルジュナ^⑩）が自ら即位し、軍隊を發動して王玄策の入国を拒んだ。このとき王玄策に従う騎兵は僅かに数十だったため、唐軍は阿羅那順に勝つことができず、兵士はみな死没し、諸国からの貢物は阿羅那順に略奪されてしまった。王玄策は遁走し、吐蕃の西の辺境地帯に奔走した。王玄策は周辺諸国に檄を飛ばして兵を徴発した。吐蕃は一千の兵を率いて王玄策のもとに至り、泥婆羅（ネパール）は七千騎を率いてやってきた。王玄策は部隊を分けて進軍し、茶鐔和羅城で阿羅那順の軍勢と戦い、三日間の戦いの後に阿羅那順の軍を打ち破って三千の首級を斬った。この戦いで溺死者は一人であった。阿羅那順は国を棄てて逃走し、散兵を合わせて再び陣地を築こうとしたが、蔣師仁がこれを生け捕りにした。捕虜にしたもの斬首したものは一千を数えた。阿羅那順の余衆が、王の妻と息子を奉じて乾陀衛江（ガンダキ河）で抵抗したが、蔣師仁がこれを撃ち大破した。蔣師仁は王妃・王子を捕らえ、男女一万二千人を捕虜とし、雑畜三万を獲得し、五百八十の城邑を降した（『旧唐書』天竺伝、『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐）。東天竺の王の尸鳩摩は牛馬三万を兵糧として唐軍に送り、弓、刀、宝の纓絡もともに贈った。また迦没路国は珍奇なものを献上し、地図も献上して、（それから太宗に向かつて）老子の像と道德経を賜りたいと請願した（『旧唐書』天竺伝）。王玄策は、阿羅那順を捕らえて長安城に連行し太宗に献上した（『旧唐書』卷三太宗紀・貞観二十二年五月庚子条）。役人達は（王玄策の戦勝を）宗廟に報告した。太宗は「いったい人というものは、耳と目が声色（＝音楽と女色）を愛で、口と鼻が匂いと味を愛でる事にはかり耽るようになるのは、敗徳（＝人道にそむき徳義を破る）の源である。もしバラモン（＝阿羅那順）が、わが使節を劫略しなければ、捕虜になることがあるか？（阿羅那順が唐使を略奪しなければ捕虜にならずにすんだのだ。）」

と言った(『旧唐書』天竺三伝)。太宗は王玄策を抜擢して朝散大夫にした。

王玄策は天竺において道士の那邏邇娑婆寐(Naraya nasvamin)⁽¹¹⁾を得た。那邏邇娑婆寐は自ら年齢が二百歳であると言ひ、不死の術を持つていると称していた(『旧唐書』天竺伝、『冊府元龜』卷九九七外臣部技術)。そこで太宗は、金廳門(きんどう)の内に館(くわん)を与えて那邏邇娑婆寐を住まわせ、鍊金術を治めさせ、兵部尚書の崔敦礼に命じて那邏邇娑婆寐を保護し監視させた。太宗はまた中国全土に使者を派遣して、もろもろの奇薬や異石を集めさせ、使節を婆羅門の諸国にも派遣して奇薬異石を収集させた。いわゆる畔茶法水(phantaka)⁽¹⁴⁾という薬は、石臼の中から生じる。石人の像があり、これを守っている。水には七種類の色があり、熱くなったり冷たくなったりして、草木や金や鉄をよく溶かすことができる。人がそれを手にのせると、たちまち爛れてしまう。そこでラクダの髑髏(こつこ)を使って瓢の中に注ぐ。咀頼羅という名の樹があった。その葉は梨に似ており、奥深い山の崖の中にはえていた。その樹の前には巨大な蝮が穴を守っているため、樹のそばに近づくことができない。しかし咀頼羅の葉を採取したいものが四角い鏃の矢を射放つと、枝はすぐに落ち、鳥の群れがこの枝を運び去ってくれる。枝を銜えたこの鳥を射落とすと、咀頼羅の枝を入手することができた。那邏邇娑婆寐の奇怪なさまは、このようであつた(『酉陽雜俎』卷七・醫)。この後、那邏邇娑婆寐の術に効力がなかつたため、太宗は詔を出して天竺への帰国を許したが、那邏邇娑婆寐は帰ることができずに長安で亡くなつた。高宗の時代、盧伽逸多⁽¹⁵⁾というものがいた。東天竺の烏茶(正しくは「烏茶」ウドラ)⁽¹⁶⁾の人で、また方術をもつて昇進し、(綏章元年〔六六八〕十月)懷化大將軍を拜した(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。

乾封三年(六六八)、五天竺の使節がすべて来朝した。開元の時、中天竺は使者を三度派遣した。(開元八年〔七二〇〕)南天竺は一度使節を派遣し、人の言葉をよく語る五色のオウムを献上した(『旧唐書』卷八玄宗紀、『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。南天竺の王はそれから玄宗に対し、軍隊の応援を求めて大食と吐蕃を討伐したいといい、その

軍隊に名をつけて欲しいと請願した。そこで玄宗は詔して（大食・吐蕃を討伐するための軍隊に）懐徳軍の名を賜った（『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐・開元八年、卷九九五外臣部交侵・開元八年七月）。南天竺の使者が「蕃夷はただ袍と帯をもって寵愛のしるしとなくします」と言ったので、玄宗は、錦の袍、金で裝飾された革のベルト、魚袋、七事（佩刀・刀子・火石など軍に必須の七つのもの）を賜った。北天竺の使者は一度だけ来朝した。

註

(1) 『漢書』卷九六捐毒国伝に「捐毒国、去長安九千八百六十里……東至都護治所二千八百六十一里」とある。『新唐書』天竺伝は『漢書』捐毒国伝に拠ったと思われる。それゆえ「都護」は漢代の西域都護と考えられる。

(2) 『通典』卷一九三边防九天竺伝によれば、稍割牛の話は法盛の『歷国伝』が出典である。『歷国伝』二卷は現存しないが、書名は『隋書』卷三三経籍志二に見える。吉川忠夫二〇〇九・二三五も参照。

(3) 『旧唐書』卷一九八天竺伝では「無喪紀之文」。尚、『大唐西域記』卷二印度では、印度（＝天竺）の葬制について「喪期無數」と記している（水谷真成一九七二・七〇、季羨林一九八五・二〇八）。

(4) 『大唐西域記』卷二印度（水谷一九七二・五六～七五、季一九八五・二六一～二二八）は、天竺の身分制度・葬礼・衣裝・文字・敬礼などに関する記述があり、『旧唐書』『新唐書』天竺伝の記事と酷似する。両唐書は『大唐西域記』を参照したのであろう。

(5) 『旧唐書』天竺伝は「云是梵天法」と記し、『新唐書』天竺伝は「妄曰梵天法」と述べている。『新唐書』は自らの価値判断を加えて「妄りに」と述べているのではないか。尚、サンスクリット文字（ブラフミー文字）は、神の梵天（ブラフマン）が作ったと言われた。水谷一九七二・六三注一を参照。

(6) 『旧唐書』天竺伝より補った。

- (7) 『旧唐書』天竺伝によれば、玄奘が天竺を訪問したのは貞観十年であった。
- (8) 『新唐書』卷二一礼楽志二一によれば、秦王李世民が劉武周と戦った際に作曲され、唐では宴会の時に必ず歌われた。
- (9) 玄奘とハルシヤ・ヴァルダナの会話は『大唐西域記』卷五(水谷一九七一・一六六)に見える。
- (10) 『旧唐書』卷三太宗紀、『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐、『資治通鑑』卷一九九・貞観二十二年は「帝那伏帝 (Tirahukū)」とする。尚、『旧唐書』天竺伝、『唐会要』卷二十陵議によれば、高宗は太宗の武勲を称える目的で、貞観年間中に擒伏・帰化した諸国の君長の石像十四体を造り、太宗の陵墓昭陵の司馬北門に並べた。阿羅那順の石像も建てられたが、一九八二年、阿羅那順の石像の台座が出土し、「帝」「国」「順」の三文字が認められた。孫遲一九八四・六二は「婆羅門帝那伏帝国国王阿那順」と刻まれていたのであると推測している。
- (11) 馮承鈞一九三二・二五は、那邏邇娑婆寐の「邇」は「延」にすべきであると考証している。尚、『全唐文』卷七〇九の李德裕の方士論、『冊府元龜』卷九九七外臣部技術は、「延」としている。
- (12) 『旧唐書』卷一九八天竺伝、『冊府元龜』卷九九七外臣部技術では「長生之術」。
- (13) 『旧唐書』天竺伝より補って訳した。
- (14) 今村与志雄一九八〇二卷・七二・七六。
- (15) 盧伽逸多のことは『旧唐書』卷八四郝處俊伝、『新唐書』卷二一五郝處俊伝、『資治通鑑』卷二〇一・総章元年十月戊午に見える。
- (16) 烏茶は、正しくは「烏荼」である。烏荼(ウドラ)は、東インドのオリッサにある。『大唐西域記』卷十烏荼(水谷一九七一・三三〇・三三一、季一九八五・八二二・八一四)。

摩揭它(マガダ)

摩揭它是摩伽陀ともいう。もともと中天竺に属する国であった。周囲は五千里で、その土地は肥沃で農業をよくし、異稻巨粒(異常なイネと巨大な米つぶ)を有した。これを供大人米(大臣にのみ供給する米)といった(『大唐西域記』卷八摩揭陀¹)。王は拘闍揭羅布羅城に住んだ。あるいは俱蘇摩補羅(Kusumapura)といひ、波吒釐子城(Paralipura)ともいった。その北には旃伽河(ガンジス)がせまっていた。貞観二十一年(六四七)、初めて唐に使節を派遣して自ら太宗に通好し、波羅樹(Dipala 菩提樹²)を献上した。この樹は白楊(ポプラ)と似ていた(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三、『唐会要』卷一〇〇雜錄)。太宗は摩伽陀に使者を派遣し、その国の熬糖法を学ばせた。それから揚州に詔して諸蔗(もろもろのサトウキビ)を献上させ、汁を压榨して剂のようにさせた。色と味は西域産の砂糖よりも数段まさった(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三、『唐会要』卷一〇〇雜錄)。高宗はまた王玄策を派遣して摩訶菩提祠(Mahabodhi-sangharama)に行かせ碑を立てさせた⁴。その後、徳宗は自ら鍾の銘文をしるして那爛陀祠(Nalanda ナーランダ寺院⁵)に賜った。

また、那揭(Nagarahara ナガラハーラ)という国があった⁶。これは摩揭它的の属国であった。貞観二十年(六四六)、那揭は使者を派遣して方物を献上した。

烏茶(正しくは「烏仗那」もしくは「烏菴」(ウディヤーナ Uddiyana))という国は、烏伏那(正しくは「烏仗那」)とも烏菴ともいい、天竺のすぐ南(正しくは西北)にあった⁷。土地の広さは五千里で、東は勃律(小勃律⁸)を隔てること六百里、西は罽賓の四百里のところにあった。山谷が互いに連なり、金・鉄・蒲陶(ブドウ)・鬱金(ウコン)を産した。稲は毎年熟した。人は物腰が柔らかで媚びへつらい、禁架術(方士の呪術)を善くした(『大唐西域記』卷三烏仗那国)。この国には死刑はなく、死罪に相当するものは奥深い山に放置した。罪の疑いのあるものには薬を飲ませ、

尿の清濁を見て罪の輕重を決定した。⁽⁹⁾五つの城があり、王は術耆藥利城(Mangalapura)に住んだ。この城は耆揭釐城(Mingora ミンゴラ)ともいい、その東北に達麗羅(Dara)川があった。⁽¹⁰⁾この川はかつて烏菴の土地であった。貞觀十六年(六四二)、王の達摩因陀訶斯が使者を派遣して龍腦香(龍涎香)を献上したので、太宗は璽書を下して優答した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三⁽¹¹⁾)。大食と烏菴が、この国の東の辺境地帯に接していた。開元中に、大食がしばしば誘ったが、烏菴王と骨咄・俱位の二王は大食の臣下になることを承知しなかった。玄宗は使者を派遣し、王を冊立した(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二・開元八年)。

章求拔国は章揭拔ともいい、もともとは西羌の種族であった(『通典』卷一九〇边防六章求拔伝)。悉立の西南の四山の山中に住み(『冊府元龜』卷九五八外臣部国邑二)、後に山の西に移住して東天竺と隣接するようになった。その国の衣服は東天竺と似ており、東天竺に属するようになった。その地は八〇九百里あまりで勝兵は二千人、城郭がなく鈔暴(武力での略奪)を好んだので商旅はこれに悩まされた(『通典』章求拔伝)。貞觀二十年(六四六)、王の羅利多菩伽が悉立国に因って使者を派遣して入朝した。王玄策が中天竺を討伐した時、章求拔国の王は援軍を派遣して王玄策を支援し、功績を立てた。それ以来、朝貢は絶えなかった(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。

悉立国は、ちようど吐蕃の西南に位置した(『冊府元龜』卷九五八外臣部国邑二)。戸数は五万户で、城邑の多くが溪流のそばにあった。男子は絹帯で頭髮を結び、氍褐(毛織物)を着用した。婦人は辮髪で短いスカートを着た。婚姻に結納がなかった。穀物は稻・麥・豆をよく産した(『通典』卷一九〇边防六悉立伝)。死者は野に葬られ、盛り土をし、木を植えて墓をつくるのがなかった。この国の葬制では人々は黒衣を着用し、丸一年が過ぎると服喪の期間が終わり、黒衣を脱いだ。刑罰には刖(あしきり)と劓(はなそぎ)があった。常に吐蕃に従属した(『通典』悉立伝)。

註

- (1) 『大唐西域記』 卷八摩揭陀（水谷真成一九七一・二四一、季羨林一九八五・六一九）。
- (2) 『冊府元龜』 卷九七〇外臣部朝貢三・貞觀二十一年三月条によれば、波羅樹は菩提樹のこと。
- (3) 季羨林一九九八、シェーファー二〇〇七・二五六を参照。
- (4) 孫修身一九九八・五〇～五三の「勅使王玄策菩提寺勒碑」は、『王玄策行伝』を引用し、碑文の立石は、高宗の時ではなく、太宗の貞觀十九年二月十一日であると考証した。尚、摩訶菩提祠については『大唐西域記』 卷八・摩訶菩提僧伽藍（水谷一九七一・二七三、季羨林一九八五・六九三）参照。
- (5) 『大唐西域記』 卷九那爛陀（水谷一九七一・二九五、季一九八五・七四七）によれば、ナーランダ寺院のこと。尚、徳宗が自ら銘文を書いた鐘をナーランダ寺院に贈ったことは『玉海』 卷三一・聖文・御製賦・唐鐘銘、卷一〇九・音楽・樂器・鐘・唐鐘銘に見える。
- (6) 法顯の『仏国記』では那竭（長沢和俊一九七一・三五）、『大唐西域記』 卷二では那揭羅曷国（水谷一九七一・七六、季羨林一九八五・二二〇）。現在のアフガニスタンのジャララバード。ナガラハラーが摩揭它に属していたという解釈は、『新唐書』の編者の誤解であろう。
- (7) 正しくはウディヤーナ（烏菟あるいは烏仗那）である。『新唐書』の編者は、東インドの烏荼（ウドラ）と混同している。ウディヤーナはスワート（現パキスタン北部）にあり天竺の西北に位置するので、「天竺の南にある」と記したのは『新唐書』の編者の誤りである。またウディヤーナが摩揭它に属していたという解釈も『新唐書』の編者の誤解であろう。尚、ウディヤーナを「烏仗那国」と記すのは『大唐西域記』 卷三烏仗那国（水谷一九七一・九九、季羨林一九八五・二七〇）、「烏菟」と記すのは『仏国記』（長沢一九七一・三四）、『魏書』 卷一〇二烏菟国伝（内田吟風一九八〇・三三）である。また、

ウディヤーナの事を『宋雲行記』は烏場国と記す(長沢一九七一・一七五)。ウディヤーナは『新唐書』西域伝・下巻にも「越底延」として出てくる。

(8) 馮承鈞二〇〇四・一一九。

(9) 「薬を飲ませて罪の軽重を決める」という話は、『宋雲行記』烏場国(『洛陽伽藍記』卷五)に「事涉疑似、以薬服之、清濁則驗、随事輕重、当時即決」と見える(長沢和俊一九七一・一七五)。「新唐書」は宋雲の記事に基づいたと思われる。

尚、『魏書』烏菟国伝には「人有争訴、服之以薬、曲者發狂、直者無恙」とある(内田吟風一九八〇・三三三)。

(10) 術菴藥利城についてはChavannee 1903: 128 ~ 129、達麗羅川に関しては馮承鈞二〇〇四・一一〇を参照。

(11) 『全唐文』卷九九九に、烏菟王達摩の手紙「貢方物献表」が載っている。

(12) 章求拔国については佐藤長一九七八・一八〇を参照。

(13) 悉立国については佐藤長一九七八・一七九を参照。

罽賓(カピシー)

罽賓は、隋の漕国である(『隋書』卷八三漕国伝)。罽賓は葱嶺(パミール)の南にあり、長安をへだてること一万二千里餘であった(『漢書』卷九六罽賓伝)。罽賓の南三千里のところ(舍衛(シユラーヴァステイー)があった。王は脩鮮城で統治し、常に大月氏に従属していた。その地は暑くて湿気が多く、人々は象に乗り、浮屠の法(仏法)に従って支配していた(『漢書』罽賓伝、『後漢書』卷八八大月氏伝、天竺伝)。

武徳二年(六一九)、使者を派遣して朝貢し、寶石で象嵌されたベルト、金の鎖、水晶製の小さな杯、小さな棗のような形をしたガラスを献上した。貞観中(貞観十一年)には名馬を献上した(『旧唐書』卷一九八罽賓伝)ので、太宗

は大臣に詔して言った。「朕が初めて即位した時、あるものが天子というものは兵を輝かして四方の夷狄を屈服させるものであると申したが、ただ魏徴だけは朕に向かつて、文徳を修めて中華を安んじるようにと勧めたものである。中華が安んじれば、遠方の異民族も威服するであろう、と。いま天下は大いに安んじ、四方の君主達はみな来献した。これは魏徴の力によるものだ。」(『旧唐書』卷七一魏徴伝) そこで太宗は、果毅の何處羅拔らを派遣して篤く罽賓国に賜わりものを下し、あわせて天竺も慰撫させた。處羅拔が罽賓に到着すると、罽賓王は東に向き、頭を地につけて再拝した。また部下を遣わして唐の使節一行を天竺まで護衛して道案内させた。貞観十六年(六四二)、褥特鼠(マングース)^③を献上してきた。この鼠は鼻がとがっていて尻尾が赤く、へびを取って食べた。毒に刺されたものがあると、褥特鼠はこれを嗅いで尿をかけた。すると傷がたちまち治った(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。

国人はみな罽賓王の始祖は馨孽(ヒンギラ)といい、曷擯支に至るまで十二代にわたって王位が継承されてきたと伝えて^④いる。顯慶三年(六五八)、罽賓の地を脩鮮都督府となした。龍朔の初め、罽賓王を脩鮮城等十一州諸軍事および脩鮮都督に任命した。開元七年(七一九)、罽賓は使者を派遣して天文学の書と秘法の奇薬を献上した(『冊府元龜』卷九九七外臣部技術)ので、玄宗は罽賓王を葛邏達支特勒に冊立した。のち(『開元二十七年』^⑤)、烏散特勒灑が年老いて息子の拂鉢罽婆に後を継がせたいと請願してきたので玄宗はこれを許可した。天寶四載(七四五)、玄宗は罽賓王の息子の勃匄準を冊立し、罽賓王と烏菴王を継承させた。乾元の初め(『乾元元年』(七五八年))、罽賓の使者が朝貢してきた(『旧唐書』罽賓伝、『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。

罽賓王の系譜

罽賓王	出典となる史料
始祖の馨孽から曷擲支に至る十二代の罽賓王	『旧唐書』罽賓伝、『冊府元龜』卷九六六外臣部・繼襲一
葛邏達支特勒の冊立	『旧唐書』罽賓伝、『冊府元龜』卷九六四・外臣部・封冊二・開元八年九月条
拂菻罽婆の即位	『旧唐書』罽賓伝、『冊府元龜』卷九六四・外臣部・封冊二・開元二十六年十月条
勃匭準の冊立	『冊府元龜』卷九六五・外臣部・封冊三・天寶四載九月条

註

- (1) 最初の部分は『漢書』『後漢書』の知識を伝えている。『旧唐書』卷一九八罽賓伝もまた『新唐書』罽賓伝と同様であり、同時代の罽賓の事を記したのではなく、前漢・後漢時代の話を伝えている。
- (2) 何姓ということはソグド人であろうか？
- (3) シェーフアー二〇〇七・一五七。
- (4) 罽賓の諸王の冊立・即位に関する史料の出典(『旧唐書』罽賓伝、『冊府元龜』)は〔表〕にまとめた。なお、罽賓国王の発行した貨幣については、Göbl 1967、Humbach 1966、Humbach 1983などを参照。

(5) 「天文の書」については、シェーファー二〇〇七：四七一。

(6) 烏散特勒灑が嫡子拂菻闕婆への嗣位を玄宗に上表した時期は、『旧唐書』闕賓伝、『冊府元龜』卷九六六外臣部繼襲一によれば、開元二十七年(七三九)のこと。

『新唐書』卷二二下 西域伝

康国(サマルカンド)

康国は薩末鞬とも颯秣建(『大唐西域記』卷一颯秣建国^①)ともいう。北魏の時の悉萬斤である。その南百五十里のところに史国(キツシユ)、西北百餘里のところに西曹、東南百里のところは米国(マイムルグ)に属し、北五十里のところに中曹がある(『隋書』卷八三米国伝・史国伝・曹国伝)。康国は、那密水(ザラフシャン川^②)の南にあり、大きな城を三十、小さな砦を三百それぞれ有していた。君主の姓は温で、もともとは月氏人^④であった。初めは祁連山脈の北にある昭武城に住んでいたが、突厥に敗れ、次第に南に移住して葱嶺(パミール)により、その地に住むようになった。庶子が枝分かれし分家して、安国(ブハラ)、曹国(カブーダーン)、石国(タシケント)、米国、何国(クシャーニーヤ)、火尋(フワーリズム)、戊地、史国に分かれ、世の人はこれを九姓と呼ぶが、この九つの国はみな、氏は同じ昭武であった(『隋書』卷八三康国伝)。康国の土壤は肥沃で穀物を産し、良馬を有し、兵卒は周辺諸国よりも強かった。人々は酒をたしなみ、街道で歌舞することを好んだ。王は帽氈(フェルト帽子)をかぶり、黄金や諸々の寶石で飾った。女性は低いまげをゆい、その上に黒い頭巾をかぶり、金の花をいくつもつないでいた。子供が生まれると石蜜(氷砂糖)を食べさせ、手のひらに膠を握らせる。大人になったら蜜のごとく甘言を弄し、宝を手に入れたら手放さないよう願ったと

言われている。子供は旁行書(横書きの胡書)を習う。商業にたけ、利を好み、男は二十歳になると他国に出かけてゆき、利益のあるところならば、どこへでも赴かぬところはなかった。十二月が年の初めで、仏教を尊び、ゾロアスター教の神々を祀る。機織が非常に巧みであった。⁽¹²⁾十一月、鼓をうち、舞をまっけて乞寒をし、お互いに水をかけあつて楽しんだ。隋の時、王の屈木支は西突厥可汗の娘を娶り、突厥の臣下になった。屈木支は武徳十年(六二七)、初めて唐に遣使して方物(名馬)を献上した(『旧唐書』卷一九八康国伝)。貞観五年(六三二)、ついに臣を称したいと請願したが、太宗は「朕は虚名を取つて人民を苦しめる事を憎む。もし康国が唐の臣下になれば、危急をとものにせねばならぬ。康国を救うために唐の軍隊を万里も離れた遠い地に赴かせることが、朕の意志であろうか？」と返答し、康国からの申し出を拒絶した(『資治通鑑』卷一九三・貞観五年)。その後(貞観九年(六三五))にまた康国は遣使して獅子を献上した。太宗は遠方から獅子が来たことを珍しがり、秘書監の虞世南に命じて賦をよませた(『旧唐書』康国伝)。これより康国は毎年朝貢し、(貞観十一年(六三七))金の桃、銀の桃を献上した。⁽¹⁶⁾太宗は詔して苑内に金桃と銀桃を植林させた(『旧唐書』康国伝)。

高宗の永徽年間(六五〇〜六五六)、康国の地を康居都督府となし、王の拂呼纒(ワルフマン)⁽¹⁷⁾を都督となした。⁽¹⁸⁾万岁通天中(六九六)、則天武后は康国の大首領の篤娑鉢提(トゥカスパタグ)⁽¹⁹⁾を王とした。王が亡くなると、息子の泥涅師師(ナルサス)⁽²⁰⁾が即位した。(神龍中(七〇五〜七〇七))に泥涅師師が亡くなると、国人は突昏(タルフン)⁽²¹⁾を立てて王とした(『旧唐書』康国伝)。開元の初め(開元六年(七一八))、鎖子の鎧、水晶の杯、瑪瑙の瓶、駝鳥の卵、越諸布、⁽²³⁾小人、胡旋舞を舞う舞姫を献上してきた(『旧唐書』康国伝)。王の烏勒伽(グーラク)⁽²⁵⁾は大食(アラブ)と激闘して勝てなかつたので、(開元七年(七一九))玄宗に援軍を要請したが、玄宗は許さなかつた。⁽²⁶⁾これより久しくして(開元十九年(七三一))烏勒伽は息子の咄曷(トゥルガル)を曹国の王に、息子の黙賈を米国の王にしたいと請願した

ので、玄宗は詔を下して許可した（『旧唐書』康国伝）。（開元二十七年〔七三九〕）烏勒伽が死んだ（『旧唐書』康国伝）。玄宗は康国に遣使して息子の咄曷²⁷を次期王として立て、（天寶三載〔七四四〕には）咄曷を欽化王に封じ、母親の可敦を郡夫人に封じた（『旧唐書』康国伝）。

康国王の系図（親子関係が分かるのは、以下の5人）

篤娑鉢提（トゥカスパタグ）―泥涅師師（ナルサス）―突昏（タルフン）―
烏勒伽（グーラク）―咄曷（トゥルガル）

* 『冊府元龜』卷九六六外臣部継襲一によれば、

親子関係が確認できるのは、篤娑鉢提・泥涅師師・突昏の3人と、烏勒伽・咄曷の2人だけ。

泥涅師師は篤娑鉢提の子、突昏は泥涅師師の子。咄曷は烏勒伽の子。

註

- (1) 水谷真成一九七二・二七、季羨林一九八五・八七〜八八。
- (2) 白鳥庫吉一九七一a・七七を参照。
- (3) 内田吟風一九八〇・二七注③を参照。
- (4) 匈奴に追われて西遷した大月氏の伝説になぞらえている。
- (5) 『北史』卷九七康国伝、『隋書』康国伝では「匈奴」になっている。
- (6) 「昭武」の語源に関しては諸説あるが、Yoshida 2003は「昭武」をCamūk（中央アジアの伝説的な王の名もしくは称号）の音写であろうと推察している。またYoshida 2004は、Camūkはソグド語ではなく、エフタルの言語に由来する可能性

もあると推察している。影山悦子二〇〇七・一二二二～一二三三も参照。

- (7) 『北史』康国伝、『隋書』康国伝、『大唐西域記』卷一 颯秣建国(水谷一九七一・二二七、季羨林一九八五・八七〇～八八〇)を参照。
- (8) 『唐会要』卷七二 諸蕃馬印を参照。尚、他のソグド諸国も良馬を産し、唐に献上している(『新唐書』安国伝・石国伝、『隋書』北史)、『通典』『唐会要』石国伝)。
- (9) 『漢詞大辞典』によれば「盤桓髻」は「低い位置で結った、まげ。くると巻いた髪の毛」とある。
- (10) 『旧唐書』康国伝では「金花」になっている。
- (11) 『旧唐書』康国伝では、明膠(晒しにかわ、透明)になっている。
- (12) 『大唐西域記』卷一 颯秣建国(水谷一九七一・二二七、季羨林一九八五・八七〇～八八〇)。ソグド人の織物に関しては影山悦子二〇〇二を参照。
- (13) 「乞寒」については『周書』卷七 宣帝紀、『唐会要』卷三四 論樂、林梅村二〇〇五・三三三～三三五を参照。
- (14) 屈木支は西突厥の葉護可汗の娘を娶り突厥に臣従した(『旧唐書』康国伝)。屈木支は、『旧唐書』康国伝、『唐会要』康国伝では屈朮支、『冊府元龜』卷九六六 外臣部 繼襲一では屋本友になっている。屈木支については、岡本孝一九八四・七九、八九、九八注五七等を参照。
- (15) 『全唐文』卷一三八 虞世南撰「獅子賦」、榎一雄一九九三a・二二六、四六注二七。
- (16) 『唐会要』卷一〇〇 雜録。
- (17) 拂呼纒については、岡本孝一九八四・七七、七九表一等を参照。
- (18) 拂呼纒が都督に任命された時期は『唐会要』卷九九 康国伝では顯慶三年(六五八)。影山一九九八も参照。
- (19) 篤娑鉢提については、岡本孝一九八四・七九表一、九〇表二等を参照。

(20) 泥涅師師について、岡本孝一九八四・八七〇九一は、貨幣にのみ表われ、中国側には知られていないソグド王マスタシではないかと推察している。

(21) 突昏については、岡本孝一九八四・七九表一、九〇表二等を参照。

(22) 駝鳥の卵については、シェーファー二〇〇七・一七七。

(23) 越諾布については『隋書』巻八三波斯伝、『冊府元龜』巻九七一外臣部朝貢四・開元六年。シェーファー二〇〇七・三四四。

(24) 小人については、シェーファー二〇〇七・八〇。

(25) 烏勒伽については、岡本孝一九八四・七九表一、九〇表二等を参照。

(26) 烏勒伽が玄宗に対して援軍派遣を要請した事については『冊府元龜』巻九九九外臣部請求・開元七年(七一九)二月条、『資治通鑑』巻二二二・開元七年二月条。小谷仲男一九九七・五一を参照。

(27) 咄曷については、岡本孝一九八四・七九表一、九〇表二等を参照。

安国(ブハラ)

安国は、布豁とも捕喝(『大唐西域記』巻一捕喝国^①)ともいう。北魏の忸蜜である。東北は東安、西南は畢(バイカンド)があり、みな百里の距離のところにある。西は烏澹河(アム・ダリヤ)の河岸に沿い、阿濫誼城において統治した。つまり、康居の小首長だった罽王の故地である。大きな城は四十、小さな砦は千あまりあった。勇敢で壮健なものを募って、柘羯(チャカル^②)にした。柘羯というのは、中国の戦士と同じようなものである。武徳年間(六一八〜六二六)、遣使して朝貢してきた。貞観の初め方物を献上したので、太宗は安国の使節をあつく安んじ、「西突厥はすでに降伏したか

ら行商を行なうがよい」と言ったので、胡人たちはたいそう喜んだ。安国の王、訶陵迦もまた名馬を献上してきた。王は、安国の王位は代々一姓で継承し、自分は二十二代目になると自称していた。この年、東安国もまた入朝し、こちらは分家して姓を継承して十代目になると言った。

註

(1) 水谷真成一九七一・三〇、季羨林一九八五・九四。

(2) 柘羯は一種のソグド人傭兵で、主人との間に私的な主従関係を結んだ。柘羯に関する先行研究には、前嶋信次一九七一a、*La Vaisière* 2005、魏義天二〇〇五などがある。

東安国(カルガン)

東安国は小安国とも喝汗(Kharqan)、『大唐西域記』卷一喝捍国⁽¹⁾ともいい、那密水(ザラフシャン川)の北にある。東二百里あまりのところに何国、西南四百里のところに大安国がある。治所は喝汗城であった。また、饗斤ともいった。大きな城が二十、小さな砦が百あった。顕慶の時(六五六―六六一)、阿湓を安息州とし、王の昭武殺を刺史とした。饗斤を木鹿(メルブ)州とし、王の昭武閉息を刺史となした。開元十四年(七二六)五月、安国の王の篤薩波提(Ughshatda)は、弟の阿悉爛(アルスラン)達弘耽發黎を派遣して来朝させ、馬と豹を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。これより八年前の開元七年(七一九)二月、王は波斯(ペルシア)産のラバを二頭、拂菻(ビザンツ)産の繡の蹴毬を一つ、鬱金香(サフラン)、石蜜などを献上し、妻の可敦は柘辟の大きな蹴毬を二つ、繡毬を一つ献上した。篤薩波提は、自身に袍帯(ベルト)と鎧杖、妻の可敦に桂欄装澤を賜らんことを願った(『冊府元龜』卷九九九外臣部請求)。

註

(1) 水谷真成一九七二・二九、季羨林一九八五・九三。

東曹国 (ストウルーシヤナ)

東曹国は、率都沙那⁽¹⁾とも蘇対沙那⁽²⁾とも劫布咀那 (カブーダーン) (『大唐西域記』卷一劫布咀那国)⁽³⁾とも蘇都識匿ともいい、およそ四つの名を持っていた。波悉山の北にある。漢の時の貳師城の地にあつた。東北二百里のところには俱戰提 (ホジェンド) がある。北の石国、西の康国、東北の寧遠はみな、およそ四百里のところにある。南五百里のところには吐火羅がある。野叉城と言う城があるが、この城には巨大な窟があり、かんぬきと錠で厳しく守られており、年ごととここでお祭をした。人は窟に向かつて立ち、中から煙が出てくるが、この煙に先にふれたものは死ぬ (『酉陽雜俎』卷四・境異・蘇都識匿国)⁽⁴⁾。高祖の武徳七年七月、東曹国は康国とともに遣使して入朝した。東曹国の使者は、「わたしは力持ちです。聞くところによりますと秦王は武勇にすぐれていらつしやるとか。どうか、わたしを秦王の部下にして下さい」と言ったので、高祖はたいそう喜んだ (『冊府元龜』卷一七〇帝王部来遠)。

註

- (1) 『通典』卷一九三边防九石国伝に「石国……南至率都沙那国界」とある。
- (2) 「蘇対沙那」は、『隋書』卷六七裴矩伝、卷八三纒汗伝・米国伝に見える。『通典』卷一九二边防八大宛伝には「隋の時の蘇対沙那は漢の大宛である」と見える。
- (3) 水谷真成一九七二・二八、季羨林一九八五・九一、白鳥庫吉一九七一a・八〇は、劫布咀那国をカブーダーンとする。ただし、白鳥氏によればカブーダーンは中曹国である。
- (4) 今村与志雄一九八〇卷二・二五二。

西曹国(イステーカーン)

西曹国は、隋の時の曹国である。南は、史国および波覽に接している。治所は瑟底痕城(イステーカーン)であった。東北にある越于底城には、得悉神の祠(1)があり、国人はこれに仕えていた。黄金の具器があり、その左側に「漢の時、天子に賜わった」と刻まれていた。武徳年間中に入朝した。天寶元年(七四二)、王の哥邏僕羅は使者を派遣して方物(馬)を献上した(『冊府元龜』卷九七二・外臣部朝貢四・天寶三載七月)。玄宗は詔を下して曹国の王を懷徳王に封じた(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三)。(天寶四載_二七四五)哥邏僕羅は上言し、「亡くなった祖父以来、わが国は天可汗(唐天子)を奉じ、唐の人々と同じように徴発されて、天子をお助けして征伐したいと願っていました」といった(『冊府元龜』卷九七七外臣部降附)。天寶十一載(七五二)、東曹国の王の設阿忽と安国の王が黒衣大食を征伐したいと請願したが、玄宗は彼らを慰めたものの出兵は許可しなかつた。(2)

註

- (1) 得悉神に関する記述は、『隋書』卷八三曹国伝、『北史』卷九七曹国伝、『通典』卷一九三边防九西戎五曹国伝にも見える。
- (2) 『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐・天寶十三載閏十一月に「東曹国王設阿及安国副王野解及諸胡九国王並遣上表請同心擊黒衣、辞甚切至、帝方務以懷柔、皆勞賜慰諭遣之、以安西域。」とある。『新唐書』西域伝の十一載は、おそらく十三載の誤りであろう。

中曹国(カブーダーン)

中曹国は西曹国の東にあり、康国の北にあった。治所は迦底真城であった。その国のものは身長が高く、大きく、戦

闘に長じていた。

石国（タシケント）

石国は、柘支、柘折とも緒時（『大唐西域記』巻一緒時国^①）ともいう。漢の時の大宛の北辺にあった。長安を去ること九千里であった。東北に西突厥、西北には波臘（フワールズム）があり、南二百里のところは俱戰提（ホジエンド）と接し、西南五百里のところは康国があった。この国の周囲は千餘里で、西の果てには素葉川（チュー河）があった。王の姓は石で、治所は柘折城であった。この城は、かつての康居の小王、罽匿城の地である。西南に葉殺水（ヤクサルテス川＝シル・ダリヤ）が流れているが、中国ではこの川を真珠川と呼んでいる。また質河ともいう。東南に大山があり、瑟瑟（ラピスラズリ）を産出する^②。この国の民は戦いが上手であり、この地は良馬を産した。隋の大業年間の初め、西突厥がこの国の王を殺し、特勒の匍職に石国を支配させた（『隋書』巻八三石国伝）。武徳、貞観年間の間に、しばしば方物を献上した。顕慶三年（六五八）、罽羯城を大宛都督府とし、石国の王・罽土屯提舍提於屈昭移^③に都督を授けた（『冊府元龜』巻九六六外臣部繼襲二）。開元の初め、この国の君主を莫賀咄吐屯に封じた。（その後、突騎施討伐の際に唐軍を支援して）功績を立てたので石国王となした（『新唐書』巻二一五下・突厥伝、『資治通鑑』巻二一四・開元二十六年）。開元二十八年（七四〇）、石国王を順義王に冊立した（『冊府元龜』巻九六四外臣部封冊二）。翌年（七四一年）、王の伊捺吐屯屈勒が上言し、「いま突厥（西突厥）はすでに天可汗に従属し、ただ大食（アラブ）だけが諸国の災いになっています。どうか大食を征伐させて下さい」と言って請願したが、玄宗は許可しなかった。天寶の初め（天寶十二載＝七五三年）、王子の那俱車鼻施を懷化王に封じ、鉄券を賜わった（『冊府元龜』巻九六五外臣部封冊三）。これより久しくして、安西節度使の高仙芝が、石国が蕃臣の礼を欠いていると行って石国を弾劾し^④、石国を征伐したいと玄

宗に請願した。それで石国の王は降伏することを約束した。高仙芝は使者を遣わして石国王を護送させたが、開遠門まで来たところで、これは石国から献じられた捕虜だという事で門の下で斬り殺した^⑤。西域の人々はこれを見てみな恨んだ。石国の王子は怒って大食のもとに逃げて援軍を要請し、タラス城を攻撃して高仙芝の軍勢を打ち破った^⑥。これ以後、石国は大食の臣下になった。宝応の時(七六二)、石国は遣使朝貢してきた(『冊府元龜』卷九七二外臣部朝貢五・宝応元年十二月)。

註

- (1) 水谷真成一九七一・二四、季羨林一九八五・八二〜八四。
 (2) 瑟瑟を産出するという東南の大山は、バダフシヤンのことであろうか。
 (3) 『唐会要』卷九九石国伝では「職土屯撰舍提于屈昭穆」となっている。吉田豊二〇〇三・六〇を参照。
 (4) 前嶋信次一九七一bは、石国が突騎施の内紛に干渉したので、唐は激怒し、石国を攻撃したと考察している。
 (5) 『新唐書』卷一三五高仙芝伝。尚、高仙芝の石国遠征は天寶九載(七五〇)の事である。
 (6) これがタラス河畔の戦いである。天寶十載(七五二)のこと。戦いの詳細は前嶋信次一九七一bを参照。

碎葉(スイアープ)

碎葉は、安西(クチャ)から西北千餘里のところであり、勃達嶺(ベダル峠)によって南は中国と接し、北は突騎施の南辺と接していた。西南を二千里すすめば葱嶺(パミール)に達する。南に流れる川は、中国を経て海(ロプノール)に入り、北に流れる川はソグドの地を経て海(アラル海)に達する。北に三日の行程を進んだ所で雪海を越える。ここは春や夏でも常に雨雪が降る。勃達嶺を越えて北に千餘里行くと細葉川に達する。東の湖を熱海(イシククル湖)とい

う。地は寒いが凍らない。西には碎葉城（アク・ベシム）がある。天寶七載（七四八）、北庭節度使の王正見が安西（の碎葉城）を討つて碎葉城を壊した。^①細葉川の長さは千里で、異姓である突厥の兵士数万が住んでいる。耕作するものたちはみな甲冑を身につけ、碎葉を略奪しては住民を奴婢にした。西はタラス城に属している。石国は常に兵士を分散してこの城を安んじた。ここから西海（インド洋・地中海）に至るまでの地域は、^②三月から九月まで、いまだかつて雨が降ったことはなく、人々は雪解け水を使って田を灌漑した（『通典』卷一九三边防九石国伝所収の杜環の経行記）。

註

- （一）『新唐書』碎葉伝の原典となる『通典』卷一九三边防九石国伝が引用する杜環の経行記には「有碎葉城、天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。」とある。安西とは、安西四鎮の一つであった碎葉城の事であろう。天寶七載の王正見の碎葉城破壊については経行記が原典である。アク・ベシム遺跡については小谷仲男二〇一〇・一八四を参照。
- （二）杜環の経行記には「從此至西海以来、自三月至九月、天無雲雨、皆以雪水種田。」とある。

怖捍（フェルガナ）

石国の東南千餘里には、怖捍（フェルガナ）がある。フェルガナ盆地の四方には山がめぐっており、土地は肥沃で馬と羊を多く産している。西千里の地に塔利瑟那^①があり、東には葉葉水（シルダリヤ）が隣接し、川の源流は葱嶺（パミール）の北原にある。水は濁っており、西北より大砂漠（キシルクム）に流れていく。水・草はなく高い山を見て、残された白骨をたどって方角を知る。五百餘里のところに康国がある（『大唐西域記』卷一怖捍^②）。

註

- （一）『大唐西域記』卷一（水谷一九七二・二六、季羨林一九八五・八五）には「窞塔利瑟那国（ストゥルーシヤナ）」とある。

「窳」を落としているのではなからうか。『通典』石国伝は「率都沙那」と見える。

(2) 水谷一九七一・二二五、季羨林一九八五・八四。

米国(マイムルグ)

米国は、弥末とも弭秣賀(『大唐西域記』卷一弭秣賀国^①)ともいう。北へ百里進んだところに康国がある。治所は鉢息徳城(ペンジケント)^②であった。永徽の時(永徽五年〔六五四〕)、米国の王は大食に打ち破られてしまった(『冊府元龜』卷九九五外臣部交侵)。顯慶三年(六五八)、その地を南謚州とし、米国の王、昭武開拙を刺史とした。これ以後、朝貢は絶えなかった。開元の時、璧、舞筵、獅子、胡旋舞の舞姫を献上した。開元十八年(七三〇)、大首領の末野門が来朝した。^④天寶初め(天寶三載〔七四四〕)、(玄宗は)米国の王を恭順王に封じ、母親の可敦も郡夫人となした(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三)。

註

(1) 水谷真成一九七二・二八、季羨林一九八五・八九〜九一。

(2) 馬小鶴一九八七は、鉢息徳城がペンジケントに相当すると結論づけている。

(3) 開拙の名は、『隋書』卷八三米国伝に従って「閉拙」と訂正すべきである。詳しくは吉田豊一九九二・一六五。

(4) 末野門の事は『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四に「天寶九載、康国王遣大首領末野門献馬十匹及方物」と見える。また、開元十八年の米国の朝貢に関しては『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四に「開元十八年、米国遣使来朝貢」、『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二に「開元十八年米国等遣使来朝」とある。『新唐書』は、これらの記述を混同したのであろうか？

何国（クシャーニーヤ）

何国は、屈霜你迦（『大唐西域記』卷一屈霜你迦国^①）とも貴霜匿ともいう。康居の小王、附墨城の故地である。城の左（東）には二重の樓閣^②があり、その北側には歴代の中国皇帝、東側には突厥・婆羅門、西側には波斯・拂菻などの諸王が描かれており、何国の君主は毎朝、望楼に参詣して拝み、退出した。貞観十五年（六四一）、遣使して入朝した。永徽の時、上言し、「唐が出撃して西方を征伐すると聞きました。どうか唐軍に兵糧を輸送させて下さい」といった。その後、何国の地を貴霜州となし、何国の王、昭武婆達地に刺史を授けたので、何国王は使者の鉢底失を遣わして感謝した。

註

（一）水谷真成一九七一・二二九、季羨林一九八五・九二一・九三。

（二）『通典』卷一九三边防九西戎五何国伝は、城楼とする。

（三）『通典』何国伝には「城楼の北壁には華夏の天子を描き、西壁には波斯・拂菻諸国の王を描き、東壁には突厥・婆羅門諸国の王を描いていた」とある。

火尋（フワーリズム）

火尋は、貨利習弥（『大唐西域記』卷一貨利習弥伽国^①）とも過利ともいい、烏澹水（オクサス河）の北にある。東南六百里に戊地があり、西南は波斯と境を接し、西北は突厥の曷薩（ハザール）^②と境を接している。康居の小王、輿鞬城の故地である。治所は急多颯遮城であった。もろもろの胡人は車と牛しか有さず、商人はこの牛車に乗って諸国に商売に行く。天寶十載（七五二）、王の稍施芬は使者を派遣して朝貢し、黑塩を献上した（『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四）。宝応の時（七六二）、また入朝した（『冊府元龜』卷九七二外臣部朝貢五）。

註

(1) 水谷真成一九七一・三一、季羨林一九八五・九六〜九七。

(2) ハザール族については『新唐書』西域伝の波斯、拂菻、大食に突厥可薩部として言及されている。

史国(キツシユ)

史国は佉沙とも羯霜那(『大唐西域記』卷一羯霜那国⁽¹⁾)ともいう。独莫水の南にある康居の小王、蘇雍城⁽²⁾の故地にあった。西百五十里のところに那色波(ナサフ)があり、北二百里のところは米国に属し、南四百里には吐火羅があった(『隋書』卷八三史国伝)。鉄門山という山があり、その左右は高く切り立って険しく、石の色は鉄のような色をしており、関所をもうけて二つの国の境界線を限定し、鉄製の門扉で嚴重に閉ざっていた(『大唐西域記』卷一鉄門⁽³⁾)。城には神祠があり、祭るたびに羊を千匹必ず犠牲として献じた⁽⁴⁾。戦争等の際には、まず神祠で祈ってから戦闘を始める。その国には城が五百あった。隋の大業中、王の夷狄遮(逖遮)が初めて中国に通好し、このころ最も強盛を誇っていた(『隋書』卷八三史国伝)。乞史(キシユ)城を築いたが、この城の大きさは四方数十里であった(『通典』卷一九三边防九史国伝)。貞観十六年(六四二)、王の沙瑟畢は方物を献じてきた(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三、『唐会要』卷九九史国伝)。顕慶(三年Ⅱ六五八)、この地を佉沙州とし王の昭武失阿喝を刺史にした(『冊府元龜』卷九六六外臣部継襲一)。開元十五年(七二七)、王の(阿)忽必多是、舞姫と、模様のある豹を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。この後ほどなくして史国の君主は亡くなったが、また新しい王が即位するということを、しばしば繰り返し、時たま入朝してきた。天寶三載(七四四)、史国の名を改めて来威国となした(『旧唐書』卷九玄宗紀・天寶三載十月丁未、『唐会要』卷九九史国伝)。

註

- (1) 水谷真成一九七一・三二、季羨林一九八五・九七。
 (2) 蘇雍城の事は『漢書』卷九六康居伝、『晋書』卷九七康居伝、『通典』卷一九三康居伝に見える。康居の王の居城であった。
 (3) 水谷真成一九七一・三三二、季羨林一九八五・九八。

(4) 上述の西曹国には得悉神の祠があり、羊や馬を犠牲として献じた。得悉神の神祠については『隋書』卷八三、『北史』卷九七、『通典』卷一九三边防九、『唐会要』卷九八曹国伝を参照。

那色波(ナサフ)

那色波は小史国ともいった。おそらく史国に従属する国であろう(『唐会要』卷九九史国伝)。吐火羅の故地に位置し、東は葱嶺を扼し、西は波刺斯(ペルシア)に接し、南には雪山があった。

縛芻水(アム・ダリヤ)の北をめぐれば咀蜜(テルメズ)という国があり、自ら独立国であつて、その国の周囲は東西六百里であつた。また東に四種の国を通過すると鑊沙(ワクシユ)という国があり、その広さは三百里、長さは五百里で、東は骨咄(クツタル)と境界を接した。葱嶺(パミール)と接して十八の国がある。南には掲職があり、やや大きく、その面積はおよそ千里で山岳が連なっている。菽(まめ)・麥(むぎ)を多く産し、気候は寒烈であつた。東南に進めば雪山(ヒンドウークシユ)の北斜面にさしかかる。六百里行くと、吐火羅(トカラ)に至る。また五種の国をこえて婆(娑)羅靚邏(シャールトラ)に至る。北は山を越えて六百里行くと烏菴国(ウディヤーナ)という国に達する。東北に二百里行くと、河(阿)波羅水に達する。河は西南に流れ、春夏でも凍結していた。北に十二種の国を経ると婆

羅吸摩補羅があつた。これは最大の国であり、長く連なつた地は四千里で、山がその外側をめぐつていて、土地は肥沃で、罽(真罽)、水晶を産出した。北の大雪山(ヒマラヤ)を越えれば、東女国である。さらに十九種族を経て、摩揭陀(マガダ)に到達する。また東に四種の国を過ぎると、大河(ガンジス)を越えて、迦摩縷波(カールムルバ)がある。みな険しい坂で、その地は西南夷に接し、その地の人々は蛮獠に似ていた。二ヶ月行くと蜀の南辺に入る。その東南の野には、野生の象が群れ暴れている。それ故、いくさに戦象を用いるのである。また南に三十二種の国を経ると、狼揭羅という国がある。その地の大きさは数千里で、その国の君主は、窰菟黎濕伐羅城で支配していた。西北は波刺斯(ペルシア)で、伝え聞くところによれば広さは万里で、王は蘇刺薩儻那城^{スラスターナ}で統治していた。土地は蒸し暑く、水を引いて田を営んでいた。人々は豊であり、金、銀、水晶を産出した。工芸に巧みで、錦、褐、毼^ク(毛氈)を織つた。良馬と駱駝を産した。この国の人々は錦や氈(織目の細かい毛織物)を着用した。賦税は人ごとに四銀錢を徴収した。この国はまた交易を生業にしていた。西北は拂菻(ビザンツ)をへだて、西南は海島と境を接して西女の種族が住んでいた。この住民はみな女子で、多くの珍しい宝を産し、拂菻に属しているので拂菻の君主は年ごとに男子を遣わして西女国の女に娶わせている。西女国では慣わしとして男を産んでも育てない。また、臂・多・勢・羅の四種⁽²⁾の国があり、西北に大山広川を越え、小さな城をたくさん経て二千里行けば、謝颯(ザーブリスターン)に到達する。

北へ五百里行つたところに弗栗特薩儻那(ヴリジスターナ)がある。その地の大きさは横二千里、縦千里である。その君主は突厥の種で、護苾那(フビナ)城で統治した。東北の大雪山(ヒンドウークシュ)は盛夏でも常に凍つており、氷を穿つて渡る。山を降ると安咀羅縛(アンダラーバ)という国があり、その地は三千里であつた。西北に進んで嶺を越えて四百里行くと闊悉多(コシュト)がある。西北三百里のところには活(クンドウズ)という種族がいる。この地の大きさは二千里である。この三種族はみな吐火羅(トカラ)の故地に住んでおり、突厥に臣従していた。この国の君

主も突厥族であった。鉄門の南の諸族の上に君臨していた。この国の生活様式は、移動して一ヶ所に常住することがなかった。東にはまた七種の国があり、東南の狭い道は甚だ険しかった。およそ三百里で俱蘭（クラーン）に到達できる。東北の山を行くこと五百里で護蜜（ワハン）に達する。北は識匿（シクナーン）であった。南には商彌（チトラル）があり、その地の大きさは二千里餘であった。ブドウを多く産し、雌黄（顔料）は石を穿って採取される。東北に山を越えて七百里行くと波謎羅川（パミール川）に到達する。この地は東西千里、南北百里で、春夏でも雪雨であった。南には鉢露（バルチスタン）という国があり、紫金（赤銅）を多く産した。五百里行くと掲盤陀（タシユクルガン）がある。東に八百里行くと葱嶺（パミール）に至り、八百里で烏鍛に達する。烏鍛（ヤルカンド）の四方は千里で、白・黒・青の三種類の玉を産出した。この国の君主は代々掲盤陀（タシユクルガン）に臣従していた。北に砂漠を経て進み、荒野五百里を越えると疏勒（カシユガル）に達する。東南に五百里進んで徙多水（ヤルカンド川）を渡り、大沙嶺を越えると斫句迦（カルガリク）という国がある。斫句迦（カルガリク）は沮渠そきよともいう。その地の大きさは千里であった。東に八百里こえると于闐（ホータン）に着く。東には媲摩川（ウズン・タテイ）がある。砂漠を越えて二百里進むと、尼壤城（ニヤ）に達する。大きな沢の中にあり、その地は澤で温度も湿度も高く、蘆草が地に生い茂っている。その地を進むものは道をうがち、ニヤ城を目指し、ついぞ于闐に到達する。于闐は東の関門とした。また東に進んで大流砂に入ると足跡もないので、その地を往復するものは迷ってしまう。そこで、遺骸を集めて、それで道を知るのである。水や草はなく熱風は凄まじく、人も六畜も迷い斃れる。進むこと四百里で、かつての靚貨邏に到達する。また六百里で、かつての折摩馱那（チャルマダナ）に着く。そこは、いにしえの且末（チェルチェン）である。また千里行くと、かつての納縛波（ミールン）に着く。そこは昔の楼蘭（ローラン）である。咀蜜（テルメズ）より以下の国は、中国人はみな、国の名をもって、その種族の名とした。いまだかつて唐と通好がないので伝記は雑で正しくないが、やむを得ず、考え

て、その地と諸国を連続し大雑把にその名前を序列して記した。

註

(1) これより以下は、『大唐西域記』卷一(親貨邏国故地、鑠沙国)、卷三(烏仗那国)、卷四(婆羅吸摩補羅国)、卷十(迦摩縷波国)、卷十一(狼揭羅国、波刺斯国、臂多勢羅国、稽置那国)、卷十二(弗栗特薩儻那、安昭羅縛国、闍悉多国、活国、商弥国、竭盤陀国、斫句迦国)等に基づいて諸国を羅列したものである。

(2) 『大唐西域記』卷十一臂多勢羅国(水谷一九七一・三六七、季一九八五・九四四)。現在のハイデラバードに比定される。『新唐書』は「臂多勢羅」を四文字に区切り、四つの国であると誤って解釈したようである。

寧遠(フェルガナ)^①

寧遠はもともと拔汗那で、あるいは鍩汗(『隋書』卷八三鍩汗伝)ともいう。北魏時代には破洛那といった。長安を去ること八千里で、治所は西韃城(アクシカント)^②にあり、真珠河(シルダリヤ)の北にあった。大きな城が六つ、小さな城は百ある。住民の多くが長命である。寧遠の王は、魏晋以来、継承されて絶えなかった。元且ごとに王と首領たちは二つのグループに別れると、各々から一人ずつ出させて甲冑を着せて戦わせた。人々が瓦石でもって戦闘に加わる。死者が出たら止め、これによって、この年の吉凶を占った(『西陽雜俎』卷四・境異・寧遠伝)^③。

貞観年間に王の契苾が西突厥の瞰莫賀咄によって殺され、阿瑟那鼠匿がその城を奪った。鼠匿が死ぬと、息子の遏波之が契苾の兄の息子・阿了参を王となし、呼悶城(ホジエンド)において統治させた。遏波之自身は、渴塞城(カーサーン)で統治した。顯慶年間の初め、遏波之が使いを遣わして朝貢してきたので高宗はあつく慰諭した。顯慶三年

(六五八)、高宗は渴塞城を休循州都督府となし、阿了参に刺史の位を授けたので、阿了参も毎年、朝貢するようになった。玄宗の開元二十七年(七三九)、王の阿悉爛達干が唐軍を助けて突騎施の吐火仙(位…七三八〜七三九年)を平定したので、玄宗は褒美として阿悉爛達干を奉化王に冊立した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。天寶三載(七四四)、国号を寧遠と改めた(『冊府元龜』卷九九九外臣部請求・開元二十九年)。玄宗が母の実家の姓(竇氏)を下賜したので、寧遠王は竇と改めた(『冊府元龜』卷九九九外臣部請求)。また玄宗は宗室の女を封じて和義公主となして寧遠王に降嫁させた(『冊府元龜』卷九九九外臣部親二)。天寶十三載(七五四)、寧遠王の忠節は息子の薛裕を派遣して朝させ、宿衛となって朝廷に留まり中華の礼節を学びたいと請願したので、玄宗はこれを許可し、薛裕に左武衛將軍を授けた。寧遠が唐に仕える事は、諸国の中で最も慎み深かった。

註

- (1) フェルガナ国としては、怛捍国として前出。それは玄奘の『大唐西域記』卷一怛捍国に基づく。尚、稲葉稯二〇〇六…五〜六に『新唐書』寧遠伝の抄訳あり。
- (2) フェルガナの城の名と場所は、内藤みどり一九八八の西突厥史参考略地図を参照。
- (3) 今村与志雄一九八〇一巻…二五二を参照。
- (4) 玄宗の母昭成皇后の実家は、竇氏(『旧唐書』卷五一昭成皇后竇氏伝)。

大勃律(バルチスタン・ポロール)

大勃律は、布露ともいった。吐蕃のすぐ西にあり、小勃律と接している。西隣には北天竺、烏菟(ウディヤーナ)がある。その地は鬱金香をよく産出した(『大唐西域記』卷三達麗羅川、^①『旧唐書』卷一九八勃律伝)。吐蕃に役属している。万

歲通天(六九七)から開元年間まで三度使者が来朝した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三・万歲通天二年、卷九七一外臣部朝貢四・開元四年と開元五年)。そこで君主の蘇弗舍利支離泥を冊立して王となした(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二・開元五年)。亡くなったので、蘇麟陀逸之を冊立して王位を継承させた(『旧唐書』勃律伝、『冊府元龜』卷九六四封冊二・開元八年)。王はふたたび大首領を遣わして方物を献上させた(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二・開元十六年)。

註

(一) 水谷真成一九七二・一一一、季羨林一九八五・二九五。

小勃律(ギルギット)

小勃律は、長安を去ること九千里あまり、東少南三千里に吐蕃の贊普の牙城(ラサ)があり、その東八百里は烏菴に属している。東南三百里には大勃律があり、南五百里には箇失蜜(カシミール)、北五百里には護蜜(ワハン)の娑勒城がある。王は孽多城(ギルギット)に住まい、娑夷水に臨む。その西の山の頂には大城があり迦布羅という。開元の初めに王の没謹忙が来朝し、玄宗は没謹忙を息子として待遇し、小勃律の地を綏遠軍とした(『新唐書』卷二六吐蕃伝)。小勃律国は吐蕃に近接しているために、しばしば困苦した。吐蕃は「我々は、なんじの国を謀るのではない。道を借りて安西四鎮を攻撃したいだけだ」と言った。これより久しくして、吐蕃が九城を奪い取ったので、没謹忙は北庭節度使に救援を要請した。北庭節度使の張孝崇は、そこで疏勒副使の張思礼に精兵四千を統率させて昼夜兼行で小勃律に向かわせた。没謹忙は出兵して吐蕃を大いに破り、吐蕃兵数万を殺して九城を奪還した。玄宗は詔し、没謹忙を冊立して小勃律王となした。没謹忙は、大首領の察卓那斯摩没勝を遣わして玄宗に謝した(『冊府元龜』卷三五八將帥部立功十一、『資

治通鑑』卷二二二)。

没謹慎が亡くなると息子の難泥が王になった。難泥が死ぬと兄の麻来兮が即位した。麻来兮が死ぬと、蘇失利之が即位したが、吐蕃が密かに誘い蘇失利之に吐蕃王の娘を娶らせた。そのため西北の二十餘国がみな吐蕃に臣従してしまい、唐への貢献が入らなくなってしまう。安西都護が三度討伐を行なったが、戦功を上げる事はできなかった。天寶六載(七七七)、玄宗は安西副都護の高仙芝に詔して小勃律を討たせた(『旧唐書』卷一〇四高仙芝伝、『新唐書』卷一三五高仙芝伝)。高仙芝は先に將軍の席元慶に千騎を率いさせ、蘇失利之に会って「道を借りて大勃律に向かいたい」と言わせた。城内の首領五、六人は、みな吐蕃の腹心であった。高仙芝は席元慶に約束して言った。「わが軍が至れば、吐蕃と通謀している首領達はきつと山に逃げ込もう。おまえは彼らに勅書を見せて慰撫し、綸綵を下賜するようにせよ。首領達が戻ってきたら捕縛して私を待て。」席元慶は約束どおりにした。蘇失利之は妻(吐蕃王の娘)を連れて逃げたが、行方は知れなかった。高仙芝が小勃律に乗り込むと、吐蕃に通じていたものたちを斬り、娑夷橋を断ち切った。この日の暮れ吐蕃軍が到来したが、小勃律を救えなかった。高仙芝は、王に降伏を約束させてから小勃律国を平定した。これにより、拂菻、大食などの諸国七十二国はみな震撼し、唐に帰順した。高仙芝は、小勃律の王とその妻を捕えて長安に帰還した。玄宗は詔を下して、国名を帰仁に改め、帰仁軍を置いて千人を募兵してここに駐屯させた。玄宗は蘇失利之を赦して誅殺せず、右威衛將軍を授け、紫の袍と黄金の帯を下賜して宿衛となした。

註

- (1) 敦煌出土のチベット語編年記によれば、吐蕃王は七四〇年(開元二十八)、小勃律王に王女を嫁がせた。王堯一九九二・一五三、一八四注五一、森安孝夫一九八四・三九。

吐火羅(トカラ)

吐火羅は、土豁羅、靚貨邏(『大唐西域記』卷一)ともいった。北魏の時には吐呼羅といつた。葱嶺の西、烏澹河の南にあり、いにしえの大夏の地であつた。吐火羅人と挹怛(エフタル人)が雜居していた。勝兵は十万、国土は土着であつた。女は少なく男が多い。北には頗黎山があり、その南の穴の中には神馬がいて、国人はこの神馬のそばで牝馬を遊牧させて仔馬を生ませる。血のような汗を流して走る(汗血馬であろう)。吐火羅の王は葉護(ヤブク)と号していた。武徳年間と貞観年間にふたたび入朝した。

永徽元年(六五〇)、大鳥を献じたが、その鳥の大きさは高さが七尺、色が黒く、足はラクダに似ていた。羽を広げて走り、一日に三百里を行き、鉄をくらい、俗に駝鳥(ダチョウ)といつた(『通典』卷一九三边防九吐火羅伝、『唐会要』卷九九吐火羅国)。顯慶年間(六五六―六六一)の間に、阿緩城(クンドウズ)を月氏都督府となし、小さい城を二十四の州となし、王の阿史那に都督を授けた。その後、二年、子を派遣して来朝させた。また、碣磧鐙樹(瑪瑙製の燭台)を献上してきた。燈台の高さは三尺であつた(『唐会要』卷九九吐火羅伝)。神龍元年(七〇五)、王の那都泥利は弟の僕羅を入朝させて宿衛として唐に留まらせた。開元、天寶年間の間にはしばしば馬、驥(ラバ)、珍しい葉、乾陀婆羅(香木)など二百の品(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・開元十二年)、紅碧色の玻璃を献上してきた。そこで玄宗は、吐火羅の君主骨咄祿頓達度を吐火羅葉護、挹怛王に冊立した(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二・開元十七年)。その後、近隣の胡人羯師(チトラル)が策謀し吐蕃を引いて吐火羅を攻めたので、葉護の失里忙伽羅は安西節度使に支援を求めてきた(『冊府元龜』卷九九九外臣部請求・天寶八載)。玄宗は、吐火羅のために出撃して羯師を征伐した。乾元の初め(乾元元年=七五八)、西域の九国と軍隊を派遣し、安史の乱平定のため皇帝に味方して賊を討伐した。肅宗は詔を下し、吐火羅軍を朔方節度使の陣地に所属させた(『唐会要』吐火羅伝)。

註

- (1) 『隋書』卷八三吐火羅伝にも神馬の記述がある。おそらく『隋書』の記述に従ったのであろう。
- (2) 『唐会要』吐火羅伝によれば、永徽五年(六五四)息子の伊吾達官弩が朝献した。
- (3) 瑪瑙燈樹についてはシェーファー二〇〇七・四四四。
- (4) 羯師は史料によって表記が異なり、『新唐書』吐火羅伝、『唐会要』吐火羅伝では「羯師」、『冊府元龜』『資治通鑑』では「羯師」である。尚、羯師を最初にチトラルに比定したのはスタイン(Stein 1921: 29)である。森安孝夫一九八四・七四注二〇三も参照。
- (5) 『資治通鑑』卷二六・天寶八載(七四九)十一月乙未、天寶九載(七五〇)三月庚子によれば、安西節度使の高仙芝が出兵して羯師を撃破し、王の勃特没を捕え、天寶十載(七五一)正月、玄宗に献上した。

挹怛(エフタル)

挹怛国は、漢の時の大月氏と同じ種族である(『魏書』卷一〇二嘽噠伝)。大月氏は烏孫によって国を奪われ、西に逃走して大宛を通過してさらに西に逃げ、大夏を撃つて征服し、大夏を臣下にした。治所は藍氏城であった。大夏とは即ち吐火羅のことである。嘽噠は、王の姓である。その後裔が、その姓をもって国の名にしたのである。訛つて挹怛、または挹闐という。風俗は突厥と同じである(『魏書』嘽噠伝)。天寶中に遣使し朝貢してきた(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・天寶七載六月)。

俱蘭(クラーン)¹⁾

俱蘭は俱羅弩⁽²⁾とも屈浪拏(『大唐西域記』卷十二屈浪拏国⁽³⁾)ともいう。吐火羅と国境を接し、国の周囲は三千里、南に大雪山(ヒンドウークシユ)、北に俱魯河(Kulub河)がある。この国は金精(ラピスラズリ)を産出した。石を打ち割って取り出した(『大唐西域記』屈浪拏国)。貞観二十年(六四六)、王の忽提婆(フタイバ)が使者を遣わして献上した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢⁽⁴⁾)。文字・言語は浮屠(インド)と似ている。

註

- (1) 俱蘭については小谷仲男一九六六・四〇二、場所については小谷仲男一九六六・三九〇の地図を参照。
 (2) 『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三に「俱蘭亦名爲俱羅」と見える。
 (3) 水谷真成一九七一・三七八、季羨林一九八五・九七三。
 (4) この時、忽提婆は自らを「俱羅那国王」と称している。

劫国(ジャムガン)⁽¹⁾

劫国は葱嶺(パミール)の中にあり、西と南は除彌(マストウジ)⁽²⁾をへだて、西北には挹怛国(エフタル)がある。長安を去ること一万二千里で、気温は常に熱く、稻、麥、粟、豆を産し、羊と馬を牧畜する。彼らの風俗によれば死者は山中に棄てる。武徳二年(六一九)、遣使して、宝石で象嵌したベルト、玻璃(ガラス)、水晶のさかずきを献上した⁽²⁾。『通典』卷一九三辺防九劫国伝。

註

- (1) 白鳥庫吉一九七〇b・三五七は、劫国をJamganであると考察した。尚、『新唐書』劫国伝は、『通典』卷一九三辺防九劫国伝に基づいている。李錦繡・余太山二〇〇九・二四〇は、『通典』の劫国、陀羅伊羅、越底延は、隋の『西域図記』

より取材したのであらうと考察している。

(2) Stein 1921 : 41~43°

(3) 「武徳二年、遣使して宝石で象嵌したベルト、玻璃、水晶の杯を献上した」という一文は、『新唐書』卷二二上・西域上・罽賓伝にも出てくる。李錦繡・余太山二〇〇九：二四〇～二四一の注五〇一も参照。

越底延 (ウディヤナ)^①

越底延は、三千里南に行くとな竺(インド)がある。西北に千里進むと賒彌(マストウジ)、東北に五千里行った所に瓜州がある。越底延は、辛頭水(インダス川)の北にある。この国の司法によると、殺人(すなわち死刑)は行なわず、罪の重いものは流刑に処され、罪の軽いものは放逐される。租税もない。この国の風俗では翦髪し、国人は錦袍を着用したが、貧しいものは白い氈(もめん)を着用した。自ら体を洗い清潔である。気候は温暖で、稻・米・石蜜を多く産出した(『通典』卷一九三边防九越底延伝)。

註

(1) ウディヤナについては『新唐書』卷二二上・摩揭它伝の中にも「烏茶(正しくは「烏杖那」もしくは「烏菴」)として出てくる。

謝颯 (ザープリスターン)^①

謝颯は、吐火羅の西南にあり、もともとは漕矩吒(『大唐西域記』卷十二漕矩吒国)^②といった。あるいは漕矩ともいった。顕慶年間(六五六～六六一)、訶達羅支といったので、則天武后がいまの国号に改めた。東は罽賓(カーブル)、東

北は帆延(バーミアーン)をへだてること、みな四百里であった。南に婆羅門(インド)、西に波斯(ペルシア)、北に護時健(グーズガン)があつた。その王は鶴悉那(ガズナ)城に住んでいる。国の周囲は七千里で、王はまた阿娑你城でも統治した。鬱金、罽草^③を多く産出した。田を灌漑した。国内には突厥人、罽賓人、吐火羅人など諸民族が雑居していた。罽賓は、謝颯の子弟を動員して兵士となし、大食からの侵攻を防衛させた。景雲年間の初め、謝颯は唐に朝貢し、のちには遂に罽賓に臣従した。開元八年(七二〇)、玄宗は葛達羅支頡利発(カダラシ・イルテベル)誓屈爾を冊立して王となした(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。天寶年間(七四二〜七五六)になって、しばしば唐に朝貢し方物を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・天寶三載、天寶十二載)。

註

(1) 稻葉穰二〇〇四・三七八に『新唐書』謝颯伝の翻訳あり。稻葉穰二〇一〇も参照。

(2) 水谷一九七一・三七〇、季羨林一九八五・九五四。

(3) 「興罽草」とある。季羨林一九八五・九五六の注四、桑山正進一九九二・一三四。

帆延(バーミアーン)

帆延は、あるいは望衍とも梵衍那(『大唐西域記』卷一梵衍那国^①)ともいった。斯卑莫連山(ヒンドウークシユ)のそばにあり、西北は護時健(グーズガン)と接し、東南は罽賓(カール)をへだて、西南には訶達羅支(カダラシ)謝颯、吐火羅と国境を連ねていた。その地は寒く、住民は穴の中に住んでいた。王は羅爛城で統治し、大きな城を四〜五有していた。川は北に流れて烏訶河(アム・ダリヤ)に流れ込んでいた。貞観の初め使者を派遣して入朝した。頭慶三年(六五八)^②、羅爛城を寫鳳都督府とし、縛時城を悉萬州となし、帆延王に寫鳳都督を授けて国内の五つの

州の諸軍を管轄させたので、これ以後、朝貢は絶えなかった。

註

(1) 水谷一九七二・四三、季羨林一九八五・二二九。

(2) 『新唐書』卷四三地理志七によれば、龍朔元年(六六一)、吐火羅道置州縣使の王名遠が「西域図記」を進呈し、于闐以西波斯以東の十六カ国に都督府の設置を進言した。これに従い、唐は寫鳳都督府等を設置して安西都護府の管轄下に置いた。顕慶三年は、西突厥の阿史那賀魯の乱が鎮定され、ソグデアアナ等の西突厥の旧領に州縣が設置されて安西都護府の下に統轄された年である。

石汗那 (チャガニアン)^①

石汗那は斡汗那ともいった。縛底野(バクトリア)から南に進めば雪山に入る。四百里進むと帆延(バーミアン)に達し、東は烏澹河(アム・ダリヤ)に臨んでいた。赤い豹を多く産す。開元、天寶年間の間は何度も朝貢してきた(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二・開元二十一年、卷九七一外臣部朝貢四・天寶十二載)。

註

(1) 石汗那をアラビア語史料のチャガニアンに比定したのは、Marguardt 1901である。チャガニアンは『大唐西域記』では卷二赤頰衍那国(水谷一九七二・三五、季羨林一九八五・一〇五)である。

識匿 (シグナーン)

識匿は、尸棄尼(『大唐西域記』卷十二尸棄尼)^①とも瑟匿ともいう。東南は京師長安を隔てること九千里、東は葱嶺守捉(タ

シユクルガン⁽²⁾を隔てること五百里、南三百里の地は護蜜(ワハン)に属していた。西北に五百里行けば俱蜜(クマード)に至る。初め、識匿の王は苦汗城(Kungian)⁽³⁾を治めていた。後に、住民達は山谷に散居した。識匿は大きな谷を五つ有し、酋長がそれぞれ自治を行なっていた。これを五識匿⁽⁴⁾といった。その地の周囲は二千里で、五穀が稔らない。住民は略奪を喜んで行い、商人を劫略した。播蜜川(パミール河)の四つの谷は、識匿の王の命令に従わなくなった。住民は、洞穴に住んでいる。貞観二十年(六四六)、似没、役槃の二国の使者と共に識匿の使者も来朝した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)⁽⁵⁾。開元十二年(七二四)、王の布遮波資に金吾衛大將軍を授けた。天寶六載(七四七)、王の跌失伽延が唐軍に従って勃律を討伐中に戦死した。玄宗は、息子を都督、左武衛將軍に抜擢し、禄を与えて藩王の地位を与えた。似没は、石国(タシケント)の北にあり、その風俗は康国と同じである。役槃はまた康国の隣にあり、良馬を有していた(『冊府元龜』卷九六一外臣部土風三・似盤国・瑟匿国、『唐会要』卷一〇〇瑟匿伝)。

註

- (1) 水谷一九七一・三八一・三八二、季羨林一九八五・九七八。
- (2) 葱嶺守捉については桑山正進一九九二・一八二・一八三。
- (3) 張毅・張一純二〇〇〇・一四六によれば、苦汗とはイラン語の城堡であるという。場所は不明。
- (4) 悟空は『入竺記』(大藏経一九二八・九九九c)で「五赤匿」と記し、識匿に五人の王がいたと述べている(張毅・張一純二〇〇〇・一四六)が、慧超は「九箇識匿国は、九箇の王が各々兵馬を領していた」(大藏経一九二八・九九九a)と述べている(桑山一九九二・四五)。「新唐書」は『入竺記』に拠ったのであろうか。
- (5) 「貞観二十年三月、西蕃似槃国王、瑟匿国……並遣使貢獻。」とある。
- (6) 『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四によれば、開元十二年、識匿王が遣使して馬・金精を献上している。

俱蜜(クマード)

俱蜜⁽¹⁾は山中に治所を持つ。吐火羅の東北にあり、南に黒河(アム河上流のアビー・パンジ)を臨んでいる。その王は、突厥の薛延陀族に属していた。貞観十六年(六四二)、使者を遣わして入朝させた(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。開元中、胡旋舞を得意とする舞姫を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・開元七年)。その王那羅延(ナラヤーナ)⁽²⁾は大食(アラブ)が苛酷な年貢を取り立てる事を唐に申し立てたが、玄宗皇帝はただ慰めた⁽³⁾だけであつた。天寶年間、王の伊悉爛俟斤^(イシキ)はまた馬を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・天寶十載)。

註

- (1) 『大唐西域記』卷一拘謎陁国(水谷一九七一・三七、季羨林一九八五・一一一―一一三)。
 (2) Chavannes 1903: 164、馮承鈞二〇〇四: 一五〇は、那羅延を Narayana とする。
 (3) 『冊府元龜』卷九九九外臣部請求・開元七年二月条に俱蜜王那羅延の援軍要請を求める上奏文が載っている。

護蜜(ワハン)

護蜜は、達摩悉鉄帝ともいい護侃ともいう。北魏時代の鉢和であり、また吐火羅の故地である。この国の東南は長安から九千里あまり、東西は千六百里、南北は狭く、わずか四〜五里であつた。王は塞迦審城(イシユカシム)に住んでいたが、城の北側は烏澹河(アム・ダリヤ)に臨んでいた。その地は非常に寒く小高い丘は曲がりくねっていて、しかも沙石が流れ込んで一面に蔓延していた。えんどう豆、ムギがあり、木果をよく産し、良馬を有していた。住民は緑色の瞳をしていた(『大唐西域記』卷十二達摩悉鉄帝)⁽¹⁾。顯慶年間(六五六〜六六一)、高宗はこの地に鳥飛州を置き、王

の沙鉢羅頡利菴イルテベルを刺史に任じた。その地は、安西四鎮が吐火羅に至る道に当たり、それゆえに吐蕃に従属した。開元八年(七二〇)、玄宗は、その王の羅旅伊陀骨咄祿多毗勒莫賀達摩薩爾を王に冊立した(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。開元十六年(七二八)、米国(マイムルグ)の首領米忽汗とともに方物を献上した(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二)。翌年、大酋長の烏鶻ウルカ達干がまた朝貢した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。王が亡くなったので、玄宗はいとこの護真檀に王位を継承させた(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。開元二十九年(七四二)、王が自ら來朝したので、玄宗は内殿で宴をして歓迎し、左金吾衛將軍に拜命し、紫袍と金の帯を賜わった(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二・開元二十一年条参照)。天寶の初め(天寶元載 〓 七四二)、王の息子の頡吉匄が吐蕃と絶交したいと請願したので、玄宗は鉄券を賜わった(『冊府元龜』卷九七七外臣部降附)。天寶八載(七四九)、護真檀が來朝(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二)して宿衛になりたいと請願したので、玄宗はこれを許可した。玄宗は護真檀に右武衛將軍を授け、しばらく宿衛をさせてから帰国させた。護蜜がまた首領を遣わして朝貢した。乾元元年(七五八)、王の紇設伊俱鼻施が來朝したので、肅宗は護蜜王に李姓を賜わった(『冊府元龜』卷九七六外臣部褒異三)。

註

(一) 水谷一九七一・三三七九、季一九八五・九九七四。

箇失蜜(カシミール)

箇失蜜は、あるいは迦濕彌邏ともいう。北は勃律(ポロール)を隔てること五百里、地をめぐること四千里、山が四方を取り囲んでいた所以他国が攻め入る事は不可能であった。治所は、撥邏勿邏布邏城(ブラバプーラ)⁽¹⁾であった。西は彌那悉多大河(ジエラム河)⁽²⁾に沿っている。その地は農作物がよく稔り、雪は多いが風は吹かなかった。火珠(ル

ビー)、鬱金、龍種馬を産出した。土着の人々は毛褐(毛織物)を着用した。⁽³⁾ 伝説によれば、この地はもとと龍池であつたという。龍が他所に移り住んだので水が尽き、人々がそこに住みつくようになった(『大唐西域記』卷三迦湿弥羅国⁽⁴⁾)。

開元の初め、箇失蜜は使者を派遣して朝貢した。開元八年(七二〇)、玄宗は王の真陀羅秘利(チャンドラピーダ⁽⁵⁾)を冊立して王となした。時折、胡薬を献上した。天木(タラピーダ)が亡くなって、弟の木多筆(ムクタピーダ)が立ち、使者の物理多を派遣して来朝させた(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二・開元二十一年)。そして言った。「国を有して以来、天可汗に臣従し、唐の徵発を受けてまいりました。わが国は、戦象、騎馬、歩兵の三種類の軍隊を有しております。わたくしが自ら中天竺王とともに吐蕃の五大道を扼して、吐蕃の出入りを禁じ、戦えば勝てましょう。天可汗の兵がもしも勃律に來れば、その兵力が二十万であろうとも、わたしは兵糧を運んでお助けいたす事ができます。また、わが国には摩訶波多磨(マハーパドマ⁽⁶⁾)という龍池があります。願わくば、ここに天可汗のために祠堂を建てたいと存じます。」このように言つて、王を冊立して欲しいと請願した。鴻臚官が箇失蜜王の言葉を翻訳して奏聞したので、玄宗は詔を下し、物理多を中殿に招き入れて宴を催し、十分な贈物を授け、木多筆(ムクタピーダ)を冊立して王となした(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。これ以来、箇失蜜は常に朝貢してきた。

箇失蜜に役属している国は五種族の国があつた。いわゆる但叉始羅(タキシラ)という国は、国土の大きさは二千里で都城を有していた。この国の東南七百里あまりのところに僧訶補羅がある。僧訶補羅の国土の周囲は三千餘里で、また都城で治めていた。東南の山を五百里進むと烏刺尸という国に到達する。国土の周囲は二千里で都城を持つていた。農業をよくした。東南に山を千里へだてれば箇失蜜である。西南の険しい地を七百里行くと半笈毘に至る。その国土の周囲は二千里である。また菟邏闐補羅という国がある。その大きさは四千里で都城を有し、山や畑が多く人は勇敢であつた。この五種族の国はみな君長がいなかつた(『大唐西域記』卷三⁽⁸⁾)。

註

- (1) 馮承鈞二〇〇四・一五二。
- (2) 水谷真成一九七二・一二五注四。
- (3) 「土着民は毛織物を着用」との記事に関しては『慧超往五天竺国伝』『迦葉弥羅』(桑山正進一九九二・三六)を参照。
- (4) 龍池(プール)の伝説については『大唐西域記』卷三(水谷一九七二・二二六、季一九八五・三三四)、『慧超往五天竺国伝』『迦葉弥羅』(桑山一九九二・一〇二注九二)。
- (5) 水谷一九七二・一二四、季羨林一九八五・三二二。
- (6) 七世紀前半から九世紀中頃までカシミールを支配したカールコータ朝に関しては、桑山正進一九九二・九八注八〇を参照。
- (7) 摩訶波多磨(マハーパドマ)については桑山正進一九九二・一〇二注九二を参照。
- (8) 水谷一九七二・一三三〜一三五、季一九八五・三〇〇〜三五〇。

骨咄(クツタル)

骨咄は珂咄羅^①ともいう。広さと長さはみな千里であった。王は思助建城で統治した。良馬と赤豹を多く産した。四つの大きな塩山があり、山では烏塩が取れた。開元十七年(七二九)、王の俟斤^{イルギン}が息子の骨都施を派遣して来朝させた(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四、卷九七五外臣部褒異二)。開元二十一年(七三三)、王の頡利筊^{イサスル}が女樂を献上した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。また大首領の多博勒達干^{タルカン}を派遣して朝貢させた。天寶十一載(七五二)、王の羅全節^{ヤンク}を冊立して葉護とした(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三)。

(1) 『大唐西域記』卷一珂咄羅國(水谷二九七二…三六、季一九八五…一一一)。

蘇毗(スビ)・多彌(タミ)

蘇毗はもともと西羌族であったが、吐蕃に併呑されて孫波(スンパ)と号し、諸族のうちで最大であった。東は多彌と接し、西は鶻莽碛とへだて、戸数は三万であった。天寶年間中、王の没陵贊は国をあげて唐に内附したいと願ったために、吐蕃によつて殺害された。そこで息子の悉諾は首領達を率いて隴右節度使に亡命した。隴右節度使の哥舒翰が悉諾らを長安城下に護送したので、玄宗は彼らをあつく礼遇した(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三、卷九七五外臣部褒異二、卷九七七外臣部降附・天寶十四載)。多彌は西羌族で吐蕃に役属し、難磨と号していた。国土は犁牛河に沿い、その地は黄金を多く産した。貞観六年(六三二)、使者を派遣して朝貢してきたので、太宗は下賜品を賜わつて帰国させた。

伊吾(ハミ)

伊吾城は、漢代の宜禾都尉の治所であった。商胡(ソグド商人)が雑居し、勝兵は千人おり、鉄勒に従属していた。人は勇敢で、土地は肥沃であった。隋末に内属し、隋は伊吾都を設置した。隋末の大乱の折にはまた突厥に臣従した。貞観四年(六三〇)、伊吾城の首領達が来朝した。東突厥の頡利可汗が滅びたので、伊吾の七城がこぞつて唐に降伏した。そこで、その地を連ねて西伊州となした(『通典』卷一九一边防七西戎総序)。

師子(セイロン島)

師子国は西南の海中にあり、面積は二千餘里で、稜伽山があり、多くの奇宝を産した。宝を波打ち際に置いておくと、商船が代金を払って宝を持っていく。⁽¹⁾後に隣国の者達が少しずつこの国に居住してきた。ライオンをよく馴らして飼育するので、師子という国名がついた。総章三年(六七〇)、使者を派遣して来朝した。天寶の初め、王の尸羅迷伽が再び遣使して、大粒の真珠、金のかんざし、宝の首飾り、象牙、白鬘^{もめん}を献上してきた。⁽²⁾

註

(1) 沈黙貿易の様子を記している。法頭の『仏国記』第五章「師子国」(長沢和俊一九七二・二二六)、『南史』卷七八師子国、『梁書』卷五四師子国に同様の事が記されているので、『新唐書』はこれらを参照したと思われる。ただ『新唐書』では、鬼神という言葉が省略されている。

(2) 『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四によれば、天寶五載(七四六)正月のこと。

波斯(ペルシア)

波斯は、達遏水(ティグリス河)の西にある。長安をへだてることおよそ五千里余りで、東は吐火羅(トカラ)、康国(サマルカンド)に接し、北は突厥の可薩部(ハザール)⁽¹⁾と隣り合い、西と南は海(インド洋)に面していた。西北およそ四千里余りの所に拂菻(ビザンツ)があった。人口は数十万で、先祖の波斯匿王は、大月氏の後裔であった。王は、この先祖の名・波斯匿にちなんで姓をなし、また国号となしていた。二城で国を統治していた。また、この国には大城が十あまりあった。この国では右が尊ばれ左が卑しまれており、天地日月水火が祭られていた。夕陽を祀る時には、麝香と蘇芳で顎鬚・顔・耳・鼻を湿らせた。西域の諸胡も、この法を受けて祇教の神々を祭っていた。礼拝する際には、必ず足を交差させた。この国の風俗では素足で歩いた。成人男子は髪を切り、衣服の襟を開かなかった。青白色の頭巾

をかぶっているが、頭巾の縁は錦で縁取られていた。婦人は辮髪し、後ろに垂らしていた。国人は戦う時には象に乗り、象一頭に兵士百人が従い、負ければみな殺された。断罪する際には文書をしるさず、法廷で決裁した。反逆者はその舌を熱した鉄で焼かれ、傷が白ければ無罪、傷が黒ければ有罪という判決が下された。刑罰には、髪切り、首かせ、足きり、鼻削ぎがあつた。小さな罪を犯したものは、頬鬚を剃り落とされるか、首に木牌（罪を記した首枷）をかけたまま数ヶ月間放置された。強盗は老いるまで獄に繋られ、泥棒は銀貨を罰金として納めた。人が亡くなると遺体は山に棄てられ、喪に服する期間はひと月あまりであつた（『通典』卷一九三波斯伝）。大気は常に熱気が上出し、土地は磨滅していて平らであつた。人々は農業と畜業を知つてゐた。鷲鳥がおり、よく羊を食らつた。駿犬、ラバ、大きなロバを多く産した。珊瑚を産出したが、その高さは三尺には及ばなかつた。

隋末、西突厥の葉護可汗（統葉護可汗）は波斯を討滅し、波斯王の庫薩和（ホスロー二世）を殺して、その息子の施利（シエローエーカワード二世）を立てた。葉護可汗は、部下の將軍を派遣して波斯を監督し統治させた。施利が亡くなると、波斯は西突厥への臣従を拒否した。波斯人は庫薩和の娘（ボラーン）を立てて王となしたが、西突厥がまたこの女王を殺害した。施利の息子の单羯方が拂菻（ビザンツ）に逃亡したので、国人は单羯方を迎えて王として立てた。これが伊怛支（アルダシール三世）である。伊怛支が亡くなると、兄の子の伊嗣俟（ヤズダギルド三世）を立てた。

貞観十二年（六三八）、使者の没似半（マルズバーン）を遣わして朝貢させた。また、活褥蛇（フエレット）²を献上してきた。姿は鼠に似ており、色は真つ青で体長は九寸あつた。活褥蛇はよく鼠の穴に入つて鼠を捕える（『唐会要』卷一〇〇雜録、『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三）。伊嗣俟は君主としての人望を失つたので首領達から追われた。吐火羅に亡命しようとしたが、途中まで逃げてきたところで大食に攻撃されて殺された。息子の卑路斯（ペーローズ）は

吐火羅に逃げたので死を免れた。卑路斯は使者を派遣して国難を告げてきたけれども、高宗は吐火羅（あるいは波斯）が遠いことを理由に援軍が派遣できないと断つて、使者を帰国させた。たまたま大食が包囲を解いて退却したので、吐火羅は軍隊を率いて卑路斯を保護した。

龍朔の初め（龍朔元年＝六六一）、また卑路斯は、大食に侵略されていると訴えてきた。このとき高宗はまさに使者（王名遠）を派遣して西域に至らしめ、州県を分置しようとしていたので、疾陵城（Zarang）を波斯都督府となし、卑路斯を都督となした（『旧唐書』卷一九八波斯伝）。にわか大食に滅ぼされ、国を失ってしまったけれども、咸亨年間中（六七〇～六七四）に入朝した。高宗は卑路斯に右武衛將軍を授けたが、卑路斯は亡くなってしまった。はじめ、卑路斯の息子泥涅師（ナルサス）は、唐に人質として滞在していた。そこで調露元年（六七九）、高宗は裴行儉に詔し、兵を率いて泥涅師を護衛して波斯に帰国し、泥涅師を復位させようとした。しかし、波斯までの道のりが遠いので、安西（四鎮）の碎葉（スイアープ）まで来たところで裴行儉は軍を遣して都に帰還した。そこで泥涅師は、客人として二十年間、吐火羅に留まったが、波斯人の部落はますます離散する一方であった。景龍の初め（景龍二年＝七〇八）、泥涅師がまた来朝したので左威衛將軍を授けた。泥涅師が病死したので、西部のみが存続する事になった。開元、天寶年間の間に、使節を十回派遣して、瑪瑙のベッド、火毛繡舞筵⁴を献上してきた（『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・天寶六載、天寶九載）。乾元の初め（乾元元年＝七五八）、大食に従つて広州を襲撃し、倉庫や廬舎を焼き、海上を船で逃げていった。大暦年間（大暦六年＝七七二）、また来朝した（『旧唐書』卷一九八波斯伝）。

また、陀拔斯單（タバリスタン）という国があった。あるいは陀拔薩憚ともいった。この国の三方向は山に阻まれ、北は小海（カスピ海）に面していた。この国の王は婆里城（婆里Sibi）に住み、代々波斯の東大將をつとめていた。波斯の滅亡後、大食に臣従する事を拒絶した。天寶五載（七四六）、王の忽魯汗が遣使して入朝した（『冊府元龜』卷

九七一外臣部朝貢四)ので、帰信王に封じた(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三・天寶六載)。その八年後、息子の自會羅を派遣して来朝したので、玄宗は自會羅に右武衛員外中郎將を拜して、紫袍、金魚を下賜し、宿衛として唐に留まらせた(『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異一・天寶十四載)。しかし、この国は黒衣大食(アッパース朝)によって滅ぼされてしまった。

註

(1) イブン・ファドラーンによれば、ハザールは七〇八世紀以降、北カフカスとウクライナ平原に成立したテュルク系の遊牧国家で(家島彦一二〇〇九・三一六注三三)、首都のイティル・ハザラーンは、ヴォルガ川がカスピ海に注ぐ河口近くにあった(家島二〇〇九・三一二注二四)。プリエトニエヴァ一九九六の訳者解説も参照。

(2) シェーフアー二〇〇七・一五八。

(3) 裴行儉の真の目的は、泥涅師を支援して波斯王に復位させる事ではなく、西突厥の阿史那都支(吐蕃と連合して安西都護府を襲撃)を油断させて捕縛する事であった。『旧唐書』卷八四裴行儉伝、『新唐書』卷一〇八裴行儉伝を参照。

(4) シェーフアー二〇〇七・三四二。

貞観年間ののち、遠方の小さな国々の君主が使者を派遣して朝貢してきた。役人達が所属不明とした国々を以下にまとめて記す。火辞彌^①という国は、波斯と接している。貞観十八年(六四四)、摩羅游の使者とともに朝貢した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三、『唐会要』卷一〇〇火辞彌国伝)。貞観二十一年(六四七)、健達(ガンダーラ)王が仏土菜^②を献上してきた。仏土菜は、莖に五つの葉を生やし、花は赤色、花蕊は紫色であった。龍朔元年(六六一)、多福王の難婆修彊宜説が使者を派遣して来朝させた。総章元年(六六八)、末陀提王という王が遣使してきた(『冊府元龜』卷

九七〇外臣部朝貢三。また、開元五年(七一七)には習阿薩般王の安殺が使者を派遣して朝貢してきた(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。開元七年(七一九)、訶毗施(カビーシー)王の捺塞が、吐火羅の大首領羅摩を代理人にして獅子と五色の鸚鵡を献上してきた。天寶の時、來朝したものは、俱爛那、舍摩、威遠、蘇吉利發屋蘭、蘇利悉單、建城、新城、俱位のおよそ八カ国である(『冊府元龜』卷九七一朝貢四・天寶五載、十載、十三載等)。俱位は、あるいは商彌(シヤミ)(マストウジ)ともいった。阿睺颯師多城で治めていた。大雪山(ヒンドウークシユ)と勃律河の北にあった。その地は寒く、五穀・ブドウ・ザクロを産し、冬は穴居した。国人は常に小勃律を助けて中国の斥候となった。新城の国は、石国(タシケント)の東北およそ百里のところにあった。弩室羯城があり、またの名を新城、あるいは小石国城ともいう。後に葛邏祿(カルルク)によって併呑された。

註

(1) 張星娘一九六九・八五〇八七。

(2) シェーファー二〇〇七・二二五。

拂菻(ビザンツ)

拂菻は、いにしえの大秦(ローマ)である(『旧唐書』卷一九八拂菻伝)。西海(地中海)上にある。一つには、海西国ともいう(『魏略』西戎伝の大秦、『後漢書』卷八八大秦伝)。京師を去ること四万里で、苦(シリア)¹⁾の西にあり、その北には突厥の可薩部(ハザール)がおり(『通典』卷一九三辺防九大秦伝「経行記」)、西は海に面していた。遅敵城があった。東南は波斯に接していた。その地の周囲は四方が一万里(『旧唐書』拂菻伝)、城が四百(『魏略』、『後漢書』大秦伝、『旧唐書』拂菻伝)、勝兵が百万もいた(『経行記』)。十里ごとに一亭とし、三亭ごとに一置(駅)を置いた(『魏略』、

『後漢書』大秦伝)。臣属する小国は数十あり、有名なものは澤散(アレクサンドリア)といい驢分(プロポントス)といった。澤散の東北は何里あるか分らなかつた。拂菻の東を二千里渡つていくと驢分に至る(『通典』卷一九三辺防九澤散伝・驢分伝)。

拂菻は石を積み重ねて首都の城壁を造つていた(『旧唐書』拂菻伝)。城壁の広さは八十里(『経行記』)、東の門の高さは二十丈で、黄金で飾られていた。王宮には三重の門があり、すべてが珍しい宝石で飾られていた。中門の中には黄金の巨大な秤が一つあり、金人が傍に立つており、はかりの末端には十二個の珠が付いていて、一時間たつごとに球が一つずつ落ち、時を知らせた。宮殿の柱は瑟瑟(ラピスラズリ)、椀(うだつ)は水晶と琉璃、梁(はり)は香木でできていた(『旧唐書』拂菻伝)。床面は黄金、扉は象牙でできていた。貴臣十二人が共同で国を統治していた(『旧唐書』拂菻伝)。王が外出する時、一人が袋を提げて王に従い、訴書があれば袋の中に投じさせ、王宮に帰つてから、王はその内容が事実か否かを裁定した。国に大災害が生じた時には、すぐに王を廃し、代わりに賢者を立てた(『魏略』、『後漢書』大秦伝、『旧唐書』拂菻伝)。王冠は鳥の翼に似ていて、沢山の珠が数珠繋ぎに飾られていた。王の衣装は錦繡で、前には襟がなかつた。王は、黄金の花で飾られた玉座に腰かけた。この玉座の傍らには、緑色の毛をした鶯鳥のような鳥が侍つており、王が食事をする際、食事に毒が混入していると、たちまち、この鳥が鳴いた。この国では建物の屋根にレンガはなく、代わりに白い石を砕いて屋根に塗つた。白石の屋根は堅固で、玉のように光沢があつた。酷暑の折には水を屋根の上まで引き、屋根から水流を滴のように落として冷風をおこした。この国の男子は髪を切り、刺繍をした袖のない衣を着て右肩を肌ぬぎ(『旧唐書』拂菻伝)、四面に帳のある白い屋根のついた小さい車に乗つて、建物等から出入りする時には旗を建て鼓を打つた(『魏略』、『後漢書』大秦伝、『旧唐書』拂菻伝)。婦人は錦の頭巾をかぶつた。億万の資産を有するものは上官となつた(『旧唐書』拂菻伝)。

この国の人々は酒を好み、乾餅を好んで食べた。この国には幻人(奇術師)が多く、顔から火を出し、手から江湖(大水)を出し、口から小旗のふさを出し、足を上げると珠玉が落ちた。名医がおり、病人の頭を切開して虫を出し、目のかすみを癒した(『経行記』)。この国は、黄金、銀、夜光璧、明月珠、大貝、車渠(玉石)³、瑪瑙、木難珠、孔翠、虎魄(琥珀)を多く産した。水羊毛を織つて布となした。これを海西布といつた(『魏略』、『通典』大秦伝)。海中に珊瑚の島がある。漁師は大きな船に乗つて珊瑚取りに出かけ、鉄の網を海中に投じて海底に降ろす。珊瑚は初め堅い岩の上にはえ、その白さはまるで菌のようであるが、一年たつと黄色、三年たつと赤色になり、枝が各々交差して高さは三〜四尺にもなる。漁師達は鉄網で珊瑚の根をはずし、綱を船上に固定して、綱を引き絞つて珊瑚を海中から引き上げる。時機を逸すると美しい珊瑚は得られず、珊瑚はたちまち腐つてしまふ⁵。西海(地中海)には市があるが、貿易のさいに互いに顔を見せず、値(あた)を商品の傍らに置いた。これを鬼市といつた(『経行記』)。獸がおり、名を贗といつた。大きさは犬ぐらいで、気が荒くて力持ちであつた(『通典』大秦伝)。北の町には羊がおり、土の中で生まれるので、へそが大地に繋がつていた。土の中にいる間に羊のへその緒を切断してしまふと羊は死んでしまふので、この町の人々は、馬を走らせ、太鼓を打ち鳴らす。子羊は驚いて土の中から跳び出て、臍の緒が断ち切れる。すると、羊は水と草を求めて移動できるようになる。しかし群れる事はできなかつた(『旧唐書』拂菻伝、『通典』大秦伝)。

貞観十七年(六四三)、王の波多力⁸が遣使して、赤い玻瓈、緑の金精(ラピスラズリ)を献上してきたので、波多力に、お返しに賜わり物を与えるようにと、太宗は詔を下した(『旧唐書』拂菻伝、『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。大食(アラブ)が次第に強くなつてきて、大將軍の摩拽を派遣して拂菻を討たせた。拂菻は大食と和睦する事を約束し、ついに大食に臣従した。乾封から大足に至る頃(六六六〜七〇一年)に拂菻はまた朝貢してきた。開元七年(七一九)、吐火羅の大首領を経由して師子と羚羊(カモシカ)を献上してきた(『旧唐書』拂菻伝、『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。

拂菻の西南から砂漠をわたること二千里のところ磨鄰という国がある。老勃薩（イエルサレム）ともいった。⁽⁹⁾その国の人間は黒人で精悍だった。この地には瘴厲（熱病）があるので、草木も五穀も育たず、馬を飼育するのに魚の干物を与え、人は鶻莽（khuma = ナツメヤシ）を食べた。鶻莽というのは、波斯粟である。⁽¹⁰⁾淫乱を恥じないことは夷狄の中でも最も甚だしい。彼らは「尋」と号していた。その君臣達は七日に一日、休みをとり、休みの日には出納と交易を行わず、夜通し酒を飲んだ（「経行記」）。

註

- (1) 白鳥一九七一b：五二五。
- (2) 李錦繡・余太山二〇〇九：二一〇～二一一。
- (3) 車渠についてはシェーファー二〇〇七：四一〇。
- (4) 水羊、海西布については白鳥庫吉一九七一a：一七八～一七九。
- (5) シェーファー二〇〇七：四一一。
- (6) 鬼市は、師子伝にも見える沈黙貿易の光景を記している。尚、現代中国語で鬼市（guǐshì）とは「売り手と買い手が互いに顔が見えないように、夜間、暗闇で明かりをとまわずに開く市」のこと。
- (7) シェーファー二〇〇七：二二五。
- (8) 当時の東ローマ皇帝は、ヘラクレイオス（在位六一〇～六四一年）、コンスタンス二世（在位六四一～六六八年）。
- (9) 李錦繡・余太山二〇〇九：二〇七注二六九を参照。「経行記」では勃薩羅国。李錦繡・余太山二〇〇九：二〇七注二七〇を参照。
- (10) シェーファー二〇〇七：二〇八～二〇九。

大食(アラブ)

大食は、もともと波斯の地であつた。男性の鼻は高く、色黒で鬣が多かつた。女性は色白で、外出する時には顔を覆つた(『通典』卷一九三边防九大食伝引用の「経行記」、『旧唐書』卷一九八大食伝)。一日に五回、天神(アラアの神)を拝した。銀の帯をしめ、銀の刀を佩び、酒も飲まず音楽もたしなまなかつた。礼拝堂(モスク)があり、数百人を収容できた。⁽¹⁾七日(金曜日)ごとに、王は高座に座つて説法して言つた。「敵を殺したものは天上に生まれ変わる。敵を殺せば祝福される。」(「経行記」)それ故、この国のものたちは戦鬪で勇敢に戦うのである。この国の土壤は石ころばかりで耕作に適さないので、人々は狩をして獲物を捕え、その肉を食べる(『旧唐書』大食伝、『通典』大食伝)。石蜜を刻んで庵を造つたが、そのかたちは輿のようであつた。この国の人々は、年ごとに貴人に瑠璃の椀や鍍金の瓶鉢等を献上した。ブドウの大きなものは鶏の卵ぐらいの大きさだつた。千里を走る馬があり、龍の種であると伝えられている(「経行記」)。

隋の大業年間に波斯国の人(ムハンマド)が俱紛摩地那山(クバマディナ山)で放牧していると、獸(ライオン)が現れて彼に言つた。「山の西に三つの穴があり、穴の中には鋭利な武器が収まつている。穴には黒い石があり、そこに白い文字が記されている。この石を手に入れば王になれる」と。波斯国の男が山の西に走つて行つて見ると、果たして獸の言葉通りであつた。石の上には「まさに叛くべし」という言葉が記されていたので、男は恆曷水(ティグリス河)において大勢の亡命者を騙して集め、隊商を劫略し、西方にある里を根拠地として自ら王を称し、黒い石を山からこの地に移してこれを宝とした。波斯の国人達は男の討伐に赴いたが、みな大敗して帰還した。ここに至り、男はついに強大となり、波斯(ササン朝ペルシア)を滅ぼし、拂菻(ビザンツ)を破り、初めて粟麥をたくわえることができた(『通典』大食伝)。南に婆羅門(インド)を侵略し、諸国を併呑して勝兵の数は四十万に至つた。康国(サマルカンド)、

石国（タシユケント）もみな大食に臣従した。その地の広さは万里に広がり、東は突騎施を隔て、西南は海（ペルシア湾）にまで及んだ（『旧唐書』大食伝）。

海の中に撥抜力（ソマリランド）という種族があり、どこにも従属していなかった。この地では五穀が育たないので、人々は肉を食べ、牛を刺して、その血と乳を混ぜ合わせて飲んだ。この国の人々は衣服を着ず、羊の皮で体を蔽っていた。女性には明晰で美しかった。その国は象牙と阿末香（龍涎香）をたくさん産した。波斯商人は交易したい時には、必ず数千人で毛織物を納め、剣で斬って血を流し、誓いを立ててから交易を行なった。兵士は防具を多く有し、弓、矢、鎧、矛を持ち、士卒が二十万に至ったが、しばしば大食によって撃破された（『酉陽雜俎』卷四・七・境異・撥抜力国）³。

高宗の永徽二年（六五一）、大食の王儼密莫末賦（アミール・アルムウミニーン⁴）第三代カリフ・ウスマーンが初めて使者を派遣して朝貢した。王の姓は大食氏であり、国を統治すること三十四年、王位を継承して三代目であると言った（『旧唐書』大食伝）。開元の初め、また遣使して、馬、鈿帶（黄金の飾り付のベルト）を献上し、謁見したけれども、玄宗に拝礼をしなかった。役人がこれを咎め、まさに弾劾しようとした時に、中書令の張説が「大食は俗を殊にしなから義を慕って来ている。罪にする事はできない。」と言ったので、玄宗は使者を赦した。大食の使者はまた来朝して言上した。「国人はただ天だけを拝するので、王に謁見しても拝礼しないのです。」役人がこれを責めると大食の使者は拝礼した（『旧唐書』大食伝）。開元十四年（七二六）、蘇黎滿（スレイマン）を派遣して方物を献上させたので、蘇黎滿に果毅を拜し、緋袍と帯を下賜した。

この部族の中には孤列（クライシユ）という種族があり、代々酋長をつとめ、白衣大食（ウマイヤ朝）と号していた。この部族には二つの姓があり、一つ目の部族を盆尼末換（プニマルワーン）、二つ目の部族を奚深（ハーシム）といった。摩訶末（ムハンマド）というものがおり、勇氣と知恵があったので、人々はこれを立てて王とした。地三千里を開拓して、

夏臘城（ヒラー）に勝利した。十四世の末換（マルワーンⅡウマイヤ朝カリフ・マルワーン二世）に至って、兄の伊疾（ヤズド）を殺して自ら王になったが、臣下達は末換の残忍さを憎んだ。呼羅珊（ホラサーン）の木鹿（メルブ）人の並波悉林（アブー・ムスリム）というものがあり、まさに末換を討伐しようという時、人々にあまねく告げて言った。「わたしを助けようと思うものは、みな黒衣を身にまとえ。」たちまち数万の群集が集まり、末換を殺して、奚深（ハーシム）の孫の阿蒲羅拔（アブー・アルアッバス）を捜し出して王となし、さらに黒衣大食（アッバース朝）と号した。蒲羅が亡くなると、弟の阿蒲恭弘（アブー・ジャアファールⅡアッバース朝二代目カリフのマンスール）が立った。至徳の初め、大食は使者を派遣して朝貢した（『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四）。代宗は、大食の軍勢を率いて安慶緒の軍勢を打ち破り、長安と洛陽を奪還した（『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐・至徳二年）。阿蒲恭弘（マンスール）が亡くなると、息子の迷地（マフディー）が立った。迷地が死ぬと、息子の牟栖（ハーディー）が立ち、死ぬと⁵その弟の訶論（ハーロン・アツラシード）が立った。貞元の時（貞元二年）、大食と吐蕃が互いに攻め合ったので、吐蕃は毎年大食と戦うために西方に軍勢を派遣した（『旧唐書』大食伝、『唐会要』卷一〇〇大食伝）。このため、吐蕃が唐の辺境地帯を略奪する事が少なくなった。貞元十四年（七九八）、使者の含嵯、烏鷄、沙北の三人を派遣して来朝させたので、みなに中郎将を拜し、帰国させた（『旧唐書』大食伝）。伝え聞くところによると、その国の西南二千里の山谷の間に木があり、人の頭のような形をした花を咲かせるという。この花と共に語ればたちまち笑い、そして落ちるとい⁶う。

註

(1) バグダッドが建都されるのは七六二年であり、杜環が訪れた時の都はクーファなので、この「経行記」が述べているのはクーファの風景である（前嶋一九七二c）。

(2) カーバ神殿の黒石の事であろう。

- (3) 今村与志雄一九八〇一卷・二四九〜二五〇。
 (4) 『旧唐書』卷四高宗紀に「永徽二年八月乙丑、大食国始めて遣使し朝献す」とある。
 (5) 『旧唐書』『唐会要』大食伝、『冊府元龜』卷九六六外臣部繼襲一より補った。
 (6) 人木説話については、小谷仲男一九八〇を参照。

大食の東には、末祿（メルブ）という小国があった。城郭を統治し、木という姓が多かった。この国は五月を年の初めとなし、絵の描かれた素焼きの甕を互いに献じあつてゐた。尋支瓜（メロン）というものがあり、大きいものは十人がかりで食べて、ようやく食べ尽くすことができた。この国に産出する野菜には、顆葱（小粒の葱）、葛藍（くずとあい）、軍達、芟薤（うぜんかずらとニラ）があつた（「経行記」）。

大食の西には、苦（シリア）という国があり、この国は独立して国をなしてゐた。北は突厥の可薩部（ハザール）をへだてること数千里であつた。五つの節度があり、勝兵が一人いた。土壤は穀物を多く産した。大河（ユーフラテス河）があり、東に流れて亜俱羅（アル・クーファ）に入つた。大勢の商人が往来し、双方の列の途切れる事がなかつたという（「経行記」）。

大食から西に十五日間進むと、都盤（^①タマーヴァンド）という国に達する。都盤は、西は羅利支（ラーリス）をへだてること十五日行程で、南は大食で二十五日の行程、北の勃達（バダツシユ）には一ヶ月の行程で到達できた。

勃達の東は、大食をへだてること二ヶ月の行程であつた。西は、岐蘭（ギーラーン）をへだてること二十日の行程であり、南の都盤、北の大食には、みな一ヶ月の行程であつた。

岐蘭の東南に二十日間進むと阿没（アモル）、あるいは阿味に達する。東南は、陀拔斯（タバリス）をへだてる

こと十五日の行程であった。南の沙蘭(シヤラムバ)には一ヶ月で到達できる。北は、海をへだてること二日の行程であった。你訶温多城に住み、馬、羊をよく産した。この国の風俗は柔軟で寛大であった。それ故、大食は常にここで遊牧した。沙蘭の東は羅利支をへだて、北は怛滿(ダイラマン Dayaman)をへだてていた。みな二十日の行程でたどりつけた。西は大食で、二十五日の行程で到達できた。

羅利支の東は都盤、北は陀拔斯をへだてること、みな十五日の行程の距離であった。西の沙蘭には二十日の行程で達し、南の大食には二十五日で到達できた。

怛滿は、あるいは怛没⁽²⁾ともいい、東の陀拔斯、北の大食には、みな一カ月の行程で赴けた。北の岐蘭には二十日で到達し、西は大食で一カ月の行程で達する。烏澹河(オクサス河)の北の平原にある河の中に住んでいた。獸は獅子が多かった。西北は史国と接し、鉄門をもって国境線となしていた(『新唐書』卷四十三下地理志所収賈耽『道里記』、『唐会要』卷一〇〇雜録・天寶二年の王忠嗣の西域図)。

天寶六載(七四七)、都盤などの六国が、みな使者を派遣して入朝してきた。そこで都盤の王謀思健摩訶延を順化王に封じ、勃達王の摩俱邏斯を守義王に封じ、阿没王の俱那胡設を恭信王に封じ、沙蘭王の卓路斯威を順礼王に封じ、羅利支王の伊思俱習を義寧王に封じ、怛滿王の謝没を奉順王に封じた(『冊府元龜』卷九六五外臣部封冊三)。

註

(1) 都盤・羅利支・勃達・岐蘭・阿没・陀拔斯・沙蘭・怛滿の国名は、前嶋信次一九七一dに従った。

(2) 『新唐書』の編者は、怛滿あるいは怛没をアフガニスタンのテルメズ(吐蜜)と誤解し、「居烏澹河以鉄関為限」の文章を挿入した。

賛じていわく。西方の夷狄は、いにしえには、いまだかつて中国に通好していなかった。漢代になって初めて烏孫諸国について記載するようになり、後には名字をもつて見るものが次第に多くなってきた。唐が興ってから、次々と朝貢する国は、おそらく百あまりとなり、みな万里の道のりと危険を冒してやって来た。また、なんと勤勉なことであるか。しかし中国には朝貢国に対して報贈の義務があり、冊立、弔問、旅行日程分の食糧や駅伝の費用も、まかなう義務があった。東は高句麗、南は真臘、西は波斯、吐蕃、堅昆（キルギス）、北は突厥、契丹、靺鞨に至るまでを八蕃と呼び、それよりも外側にある諸国を絶域と呼んで、土地の遠近を見て給費を決めた。開元の盛時には、西域の商胡（ソグド商人）に課税して安西四鎮に納めさせた。北道を経由して来るものには、輪台（龜茲付近）で税を納めさせた。国土が広ければ、それに応じて要する費用も増していくものだが、これもまた盛んな時の王の手本というものである。

参考文献および略号

史料・旅行記に関する研究

- Hirth, Friedrich 1885 : *China and the Roman Orient*, Shanghai and Hong Kong.
- Chavannes, Edouard 1903 : *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*, Paris; Repr. Taipei, 1969.
- 内田吟風 一九六五 : 「唐高宗勅撰西域志校録」『研究』(神戸大学文学会) 三三五号。
- 小谷伸男 一九六六 : 「バダフシヤンにおける玄奘の旅行」(第四・五イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊報)『東方学報・京都』三八九〜四一一頁。

- 張星煊一九六九：『中西交通史料彙編』第四冊、世界書局。
- 白鳥庫吉一九七〇a：『西域史上の新研究』『白鳥庫吉全集・第六卷 西域史研究・上巻』岩波書店。
- 水谷真成一九七一：玄奘著、水谷真成訳『大唐西域記—中国古典文学大系二二』平凡社。
- 長沢和俊一九七一：『法顯伝・宋雲行記』平凡社（東洋文庫）。
- 内田吟風一九七一：「匈奴伝（史記・漢書）訳注」『騎馬民族史1—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 護雅夫一九七二：「西突厥伝（旧唐書・新唐書）訳注」『騎馬民族史2—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 佐藤長一九七三：「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）訳注」『騎馬民族史3—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 内田吟風一九七三：「隋裴矩『西域図記』遺文纂考」『藤原弘道先生古希記念史学仏教学論集』藤原弘道先生古希記念会。
- 佐藤長一九七八：『チベット歴史地理研究』岩波書店。
- 長沢和俊一九七九：「韋節・杜行滿の西使」『シルク・ロード史研究』国書刊行会。
- 内田吟風一九八〇：「魏書」卷一百二西域伝訳注稿（内田吟風編『中国正史西域伝の訳注』京都）。
- 今村与志雄一九八〇：段成式撰、今村与志雄訳注『西陽雜俎』一卷・二卷、平凡社（東洋文庫）、一九八〇年。
- 山口瑞鳳一九八三：『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。
- 季羨林一九八五：『大唐西域記校注』中華書局。
- Beckwith, Ch. I. 1987: *The Tibetan Empire in central Asia*, Princeton University Press.
- 桑山正進一九九二：桑山正進編『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所。
- 馮承鈞二〇〇四：沙畹著・馮承鈞訳『西突厥史料』中華書局。
- 李錦繡・余太山二〇〇九：『通典』西域文献要注』上海人民出版社。

家島彦二二〇〇九：イブシ・ファドラーン著、家島彦一訳注『ヴォルガ・ブルガール旅行記』平凡社（東洋文庫）。

小谷仲男二〇一〇：小谷仲男・菅沼愛語「新唐書」西域伝訳注（一）『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』九号。

天竺（インド）

吉川忠夫二〇〇九：慧皎著、吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝（一）』岩波文庫。

馮承鈞一九三二：『王玄策事輯』『清華學報』八一。のち『西域南海史地考證譯叢』に収録。

孫遲一九八四：『昭陵十四国君長石像考』『文博』一九八四年第一期。

孫修身一九九八：『王玄策事迹鉤沉——西域佛教研究叢書』新疆人民出版社。

摩揭它（マガダ）・章求拔国・悉立国

季羨林一九九八：『糖史（季羨林文集九・十卷）』全二冊、江西教育出版社。

罽賓（カピシー）

桑山正進一九九〇：『カピシー・ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。

桑山正進一九九三：『六〇八世紀Kapis-Kabul-Zabulの貨幣と発行者』『東方学報』六五号。

白鳥庫吉一九七〇b：『罽賓国考』『白鳥庫吉全集・第六卷 西域史研究・上卷』岩波書店。

Göbl, R. 1967: *Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien* ed., Wiesbaden.

Humbach, Helmut 1966: *Baktrische Sprachdenkmäler*, 1. Wiesbaden.

Humbach, Helmut 1983: *Phnom Gesar and the Bactrian Rome. Ethnologie und Geschichte: Festschrift für Karl Jettmar*.

Wiesbaden, 303-309.

Mac Dowall, D. 1968: *The Shahis of Kabul and Gandhara. Numismatic Chronicle*, 7th Series, 8, 189-224.

Petech, L. 1964 : Note su Kāpiši e Zabul. *Rivista degli Studi Orientali*, 39, 287-294. (Selected Papers on Asian History, Serie Orientale Roma, 60, Roma, 1988, 187-194).

康国(サマルカンド)

桑原隲藏一九六八：『隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて』『桑原隲藏全集』二、岩波書店。

白鳥庫吉一九七一a：『粟特国考』『白鳥庫吉全集』第七卷、西域史研究・下、岩波書店。初出は一九二四年。

岡本孝一九八四：『ソグド王統攷—オヒイースミルノワ説批判を中心として』『東洋学報』六五卷三・四号。

榎一雄一九九三a：『魏書粟特国伝と匈奴・フン同族問題』『榎一雄著作集』第三卷、中央アジア史Ⅲ、汲古書院。

小谷仲男一九九七：『ソグドの神々とイスラム・アラブの侵攻』『西南アジア研究』四六号。

蔡鴻生一九九八：『唐代九姓胡与突厥文化』中華書局。

影山悦子一九九八：『サマルカンド壁画に見られる中国絵画の要素について—朝鮮人使節はワルフマーン王のもとを訪れたか』

『西南アジア研究』四九号。

荣新江二〇〇一：『中古中国与外来文明』北京、生活・読書・新知三联書店。

影山悦子二〇〇二：『ソグディアナにおける絹織物の使用と生産』『オリエンツ』四五卷一号。

Yoshida, Yutaka 2003 : On the origin of the Sogdian surname Zhaowu 昭武 and related problems. *Journal Asiatique* 291.

Yoshida, Yutaka 2004 : Some reflections about the origin of *čamūk*. 森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』朋友書店、

一二九—一三六頁(和文要旨、一二七—一二八頁)。

荣新江二〇〇五：『法国漢学』叢書編輯委員会編、荣新江・華瀾・張志清主編『粟特人在中国—歴史、考古、語言的新探索』

中華書局。

林梅村二〇〇五・林梅村著、杉山正明監修、川上陽介・申英蘭訳『流砂の記憶をさぐる―シルクロードと中国古代文明』日本放送出版協会。

齊藤達也二〇〇九：「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」『史学雑誌』一一八卷一二号。

小谷仲男二〇一〇：『大月氏―中央アジアに謎の民族を尋ねて』（新装版）東方書店。

森部豊二〇一〇：『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部。

安国（フハラ）

Frye, Richard Nelson 1954 : *The history of Bukhara*. Cambridge, Mass. : Medieval Academy of America

前嶋信次一九七一a : 「安史の乱時代の一二の胡語」『東西文化交流の諸相』東京、東西文化交流の諸相刊行会。

La Vaisière, E. de 2005 : *Çâkar sogdiens en Chine, Les Sogdiens en Chine, Études Thématiques 17, École française*

d'Extrême-Orient, Paris, 255-260.

魏義天二〇〇五：「粟特柘羯軍在中国」『粟特人在中国』中華書局。

米国（マイムルグ）

馬小鶴一九八七：「米国録息徳城考」『中亚学刊』一九八七年第二輯。

吉田豊一九九二：「米国」（桑山正進編『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所、一六三〜一六六頁）。

石国（タシュケント）

前嶋信次一九七一b：「タラス戦考」『東西文化交流の諸相』東西文化交流の諸相刊行会。

寧遠（フェルガナ）

内藤みどり一九八八：『西突厥史の研究』早稲田大学出版部、一九八八年。

稲葉穰二〇〇六:「ムスリム侵入時のフェルカーナ」(堀川徹編『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』平成十四年度〜平成十七年度科学研究費補助金成果報告書)。

大勃律・小勃律

Stein, Mark Aurel 1921: *Serindia: Detailed report of explorations in Central Asia and Westernmost China*, vol. 1, Clarendon.

関根秋雄一九七八:「カシユミールと唐・吐蕃抗争—とくに小勃律国をめぐる—」『中央大学文学部紀要』第八八号。

森安孝夫一九八四:「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集・史学科篇』第四号。

王堯一九九二:王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歴史文書(増訂本)』民族出版社。

謝麗(ザーブリスターン)

稲葉穰二〇〇四:「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』京都第七六冊。

稲葉穰二〇一〇:「8世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』第六九卷一号。

識匿(シグナーン)

大藏経一九二八:『大正新修大藏経』第五一卷史伝部三、大正一切経刊行会。

師子国(セイロン島)

小谷仲男一九八二:「セイロン島におけるアダムの足跡—イスラム東漸の初期例証として」『富山大学人文学部紀要』第六号。

波斯(ペルシア)

プリエトニエヴァ一九九六:プリエトニエヴァS.A.著、城田俊訳『ハザール—謎の帝国』新潮社。

拂菻(ビザンツ)

榎一雄一九九三b:「唐代の拂菻国に関する一問題(波斯国酋長阿羅憾丘銘の拂菻国)」『榎一雄著作集・第三卷 中央アジア

史Ⅲ 汲古書院。

白鳥庫吉一九七一b: 『拂菻問題の新解釈』『白鳥庫吉全集・第七卷 西域史研究・下』岩波書店。

大食(アラブ)

白寿彝一九三七: 『新唐書大食伝注』『史学集刊』一九三七年第三期。

前嶋信次一九七一c: 『杜環とアル・クーファ―支那古文献に現れた西アジア事情の研究』『東西文化交流の諸相』東西文化交流の諸相刊行会。

前嶋信次一九七一d: 『カスピ海南岸の諸国と唐との通交』『東西文化交流の諸相』東西文化交流の諸相刊行会。

小谷仲男一九八〇: 『旧唐書大食伝の人木説話』『鳥取大学教育学部研究報告・人文社会科学』三一巻二号。

前嶋信次一九八九: 『イスラム世界』河出書房新社(河出文庫)。初版は一九六九年。

前嶋信次二〇〇二: 『イスラムの時代』講談社(学術文庫)。初版は一九七七年。

『新唐書』西域伝訳注 総目次

西域伝・上

泥婆羅(ネパール)

党項(タングート)

東女

高昌(トルファン)

吐谷渾(とよくこん)

焉耆(カラシャール)

龜茲(クチャ)

疏勒(カシユガル)

朱俱波(カルガリク)・甘棠・喝盤陀(タシユクルガン)

于闐(ホータン)

以上、前号(西域伝訳注一)

以下、本号(西域伝訳注二)

天竺(インド)

摩揭它(マガダ)

罽賓(カピシー)

西域伝・下

康国(サマルカンド)

安国(ブハラ)・東安国(カルガン)・東曹国(ストウルーシヤ

ナ)・西曹国(イステイカーン)・中曹国(カブーターン)・

石国(タシケント)・碎葉(スイアープ)・怛捍(フェルガナ)・

米国(マイムルグ)・何国(クシャニーヤ)・火尋(フワー

リズム)・史国(キツシュ)・那色波(ナサフ)

寧遠(フェルガナ)

大勃律(バルチスタン)・ボロール)・小勃律(ギルギット)

吐火羅(トカラ)

挹怛(エフタル)・俱蘭(クラーン)・劫国(ジヤムガン)・

越底延(ウディヤーナ)

謝颯(ザープリスターン)

帆延(バーミアーン)・石汗那(チャガニアン)

識匿(シグナーン)

俱蜜(クマード)・護蜜(ワハン)

箇失蜜(カシミール)

骨咄(クツタル)

蘇毗(スピ)

多彌(タミ)・伊吾(ハミ)

師子(セイロン島)

波斯(ペルシア)

拂菻(ビザンツ)

大食(アラブ)